

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第211集

本内 I 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

本内 I 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成5年度の岩手県教育委員会のまとめでは8,700箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました東北横断自動車道建設事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成5年度に発掘調査を実施した湯田町本内I遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は和賀川と南本内川が合流する右岸の河岸段丘土の立地し、縄文時代の遺物のほか、近世の民家跡や溝跡、陶磁器などが発見され、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望します。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所や北上市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成6年7月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 佐々木 浩

例 言

1. 本報告書は、岩手県和賀郡湯田町^{ゆだまち}第46地割78番地1外に所在する本内^{ほんないち}I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴い記録保存を目的とする事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び調査略号は、次のとおりである。
遺跡番号 ME60-0160 調査略号 HNI-93
4. 発掘調査面積は14,000㎡であり、野外調査は平成5年4月20日から9月24日まで実施した。室内整理は平成5年11月1日から平成6年3月31日まで実施した。
5. 発掘調査は斎藤實・田畑博之、整理担当・報告書作成は斎藤實が担当した。
6. 本報告書の執筆担当者は以下のとおりである。
 - I. 調査に至る経過 三浦謙一
 - II. 立地と環境
 1. 遺跡と位置と立地 佐瀬 隆
 2. 遺跡の地形と地質 佐瀬 隆
 - II-3 以下 斎藤 實
7. 遺跡の基準点測量は株式会社ハイマーテックに委託した。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々に指導・助言をいただいた（敬称略）。
昆野靖（岩手県立総合教育センター）、高橋信雄・佐々木勝・佐藤嘉広（岩手県立博物館）、小野田哲憲・熊谷常正・中村英俊（岩手県教育委員会文化課）、利部修（秋田県埋蔵文化財センター）
9. 出土遺跡の分析、鑑定は次の方に依頼した（敬称略）。
石質鑑定 佐藤二郎（長内水源工業）
樹種同定 高橋利彦（木工舎「ゆい」）
10. 野外調査にあたっては、湯田町教育委員会をはじめ地元の方々の御協力を頂いた。
11. 調査の諸記録等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例 言

[本 文]

I 調査に至る経過	3
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置と立地	3
2 遺跡の地形と地質	4
3 基本層序	4
4 周辺の遺跡	6
III 調査方法と整理方法	
1 野外調査	14
2 室内整理	15
IV 検出された遺構と遺物	
1 掘立柱建物跡	19
2 溝 跡	31
3 その他の遺構	32
V 遺構外出土遺物	

1 縄文土器	33
2 石 器	35
3 土師器	36
4 陶磁器	36
5 土製品	37
6 古 銭	37
7 木製品	37
VI まとめ	
1 遺構について	43
2 遺物について	44
3 まとめにかえて	44
本内 I 遺跡出土材の樹種	46
報告書抄録	61

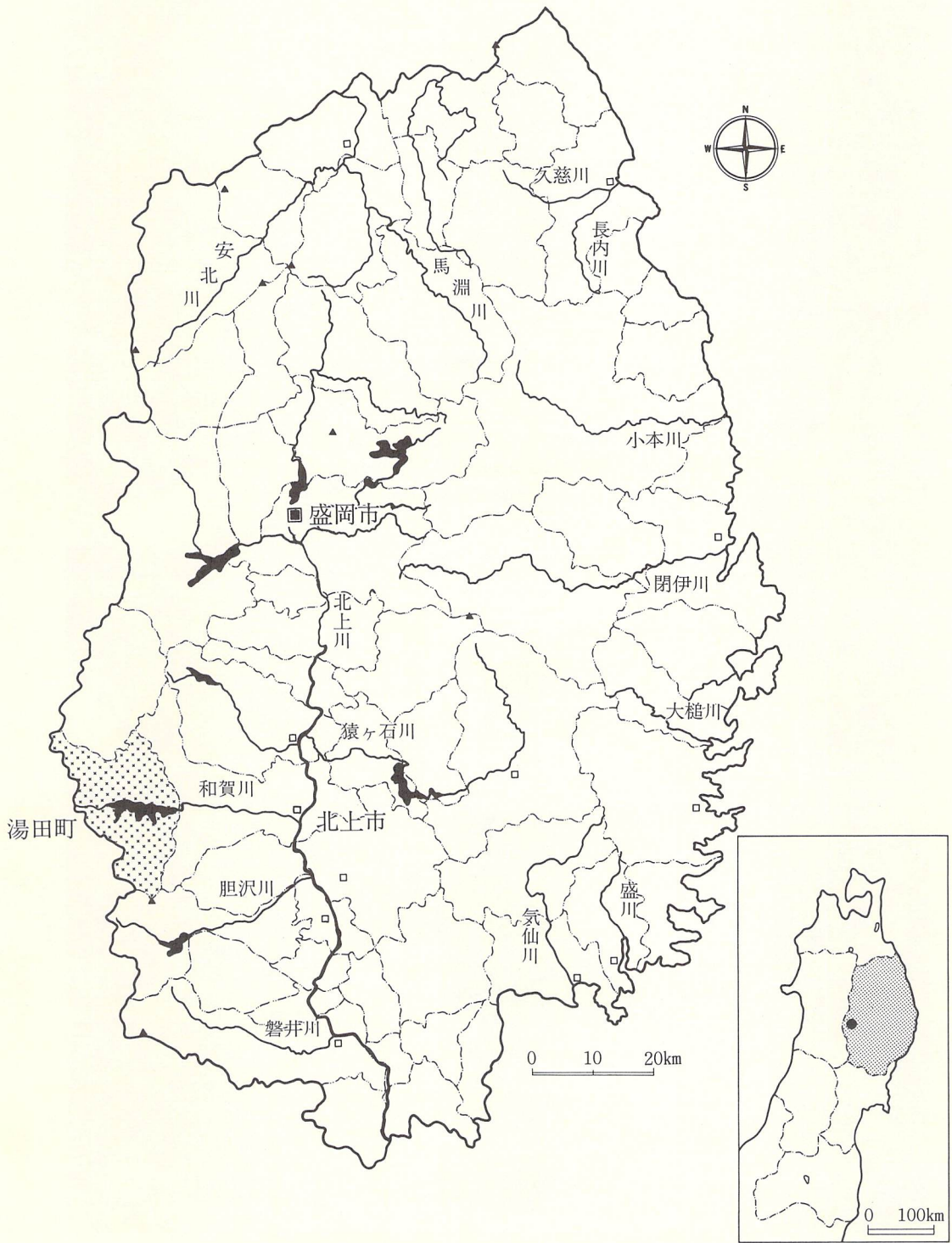
[図 版]

第 1 図 岩手県全図	1
第 2 図 遺跡位置図	2
第 3 図 平鹿盆地の東西両縁部を含む東西断面図	5
第 4 図 平鹿盆地付近の地質図	5
第 5 図 基本層序柱状図	6
第 6 図 周辺の遺跡分布図	9
第 7 図 遺跡周辺の地形図	11
第 8 図 グリッド配置図	16
第 9 図 遺構配置図	17
第10図 第 1 号掘立柱建物跡	21
第11図 第 2 号掘立柱建物跡	23

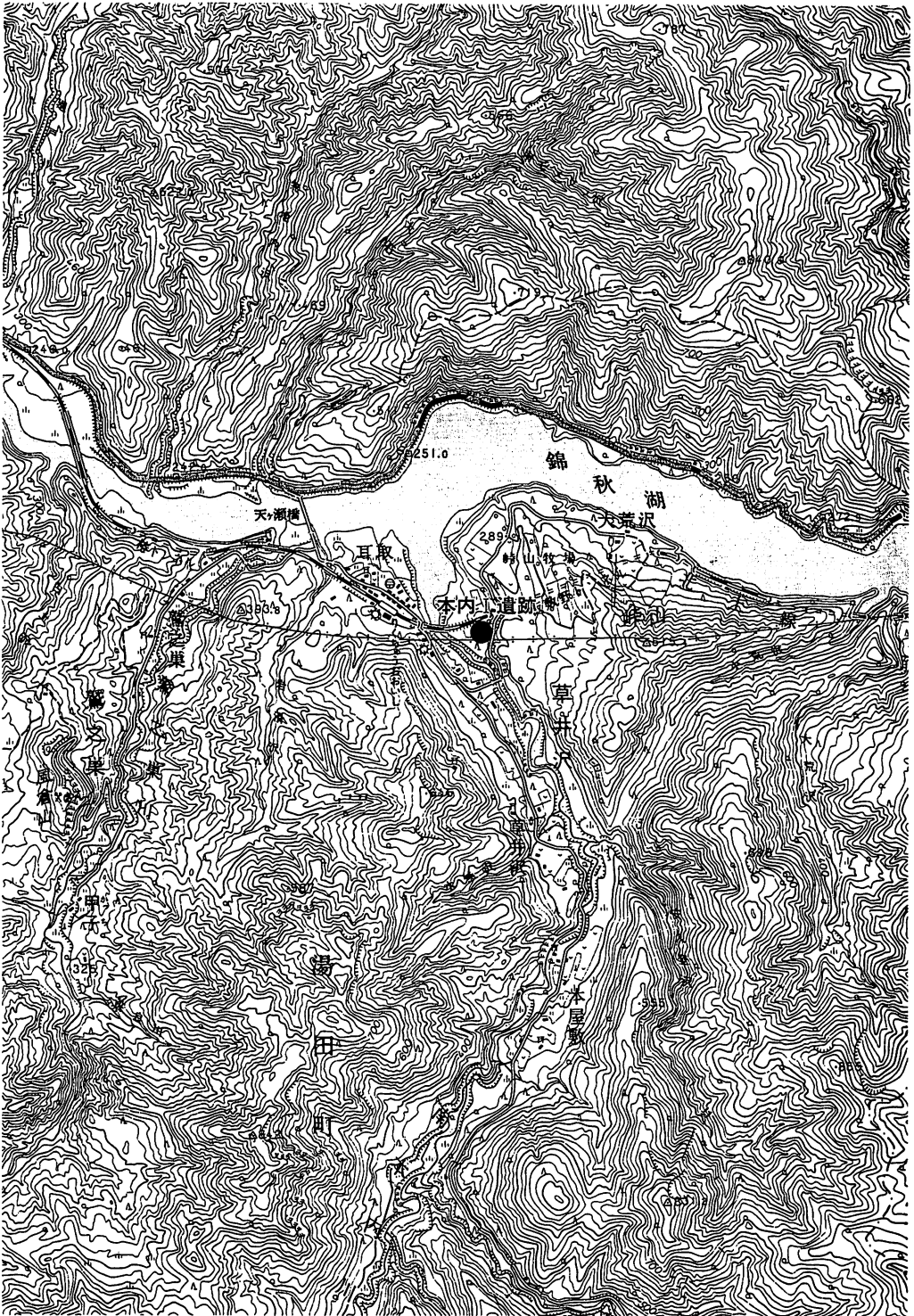
第12図 第 3 号掘立柱建物跡	25
第13図 第 4 号掘立柱建物跡	28
第14図 第一号溝跡	29
第15図 第二号溝跡	32
第16図 その他の遺構	32
第17図 遺構外出土遺物 縄文土器・土師器	34
第18図 遺構外出土遺物 陶磁器(1)	38
第19図 遺構外出土遺物 陶磁器(2)・古銭・木製品・土製品	39
第20図 遺構外出土遺物 石器(1)	40
第21図 遺構外出土遺物 石器(2)	41
第22図 遺構外出土遺物 石器(3)	42

[写真図版]

図版 1	遺跡遠景	51	図版 6	完掘状況(3)	56
図版 2	調査区全景	52	図版 7	遺構外出遺物 縄文土器・土師器	57
図版 3	溝跡・掘立柱建物跡群	53	図版 8	遺構外出遺物 陶磁器・古銭・木製品・土製品	58
図版 4	完掘状況(1)	54	図版 9	遺構外出遺物 石器(1)	59
図版 5	完掘状況(2)	55	図版10	遺構外出遺物 石器(2)	60



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・第10次施工命令区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行ってきたが、日本道路公団仙台建設局からの分布調査結果の照会に対して昭和62年5月に回答している。それに基づいた両者の協議の結果、やむを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

昭和63年以降、岩手県教育委員会が日本道路公団仙台建設局に発掘調査事業について照会して回答を得たのち、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会、財団法人岩手県文化振興事業団の三者の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査事業を実施することとした。

本内I遺跡の調査は、財団法人岩手県文化振興事業団が平成5年度埋蔵文化財調査事業の通知を平成5年3月1日付け教文第1169号で岩手県教育委員会から受け、4月1日付けの契約によって発掘調査に着手した。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と立地（第1・2・7図）

本内I遺跡は、岩手県和賀郡湯田町に所在し、東日本旅客鉄道北上線ゆだ錦秋湖駅の東方約1km、湯田町役場の東南約6km、東流する和賀川上流を堰止めてつくられた錦秋湖を挟んだ国道107号の対岸約1kmに位置する。遺跡は、北流する南本内川が和賀川に合流する右岸の河岸段丘上に立地し、比高が約20m、標高が244～263mである。調査区の現況は、山林、水田、畑地、宅地である。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図「川尻」N J 54—20—1（新庄1）の図幅に含まれ、北緯39度17分、東経140度50分付近に位置する。

遺跡の所在する湯田町は岩手県中央部の西端に位置し、東は北上市、西は秋田県雄勝郡東成瀬村、同県平鹿郡山内村、同県仙北郡六郷村、北は同県仙北郡千畑町、岩手県和賀郡沢内村、南は岩手県胆沢郡胆沢町と境を接する。同町は奥羽山脈の山間部に開けた沢内盆地の中央にあり、周囲を同山脈に囲まれている。主な山嶺は、北から女神山（956m）、割倉山（770m）、白木峠（601m）、三森山（1,102m）、蜂巢山（1,155m）、三界山（1,381m）、南本内岳（1,486

m)、焼石岳(1,548m)、牛形岳(1,389m)、鷲ヶ森山(1,207m)等である。町の総面積の82%が山林であり、11%が原野で占められている。和賀岳(1,440m)に源を発した和賀川は湯田町中央部を南流したのち、川尻付近で直角状に折れて東流する。川尻を中心に、北に湯本、湯田、左草、下前、西に柳沢、新田郷、南に湯川、鷲之巢、大石、草井沢などの集落は、和賀川とその支流である数本の川が開析した段丘上に散在している。気候は日本海側式で、県内では最も雨量が多く、豪雪地帯としても知られている。東日本旅客鉄道北上線が町の中央を横断し、湯田錦秋湖・ほととゆだ・ゆだ高原の3駅がある。国道107号(通称平和街道)がこれとほぼ並走する。

2 遺跡の地形と地質(第3・4図)

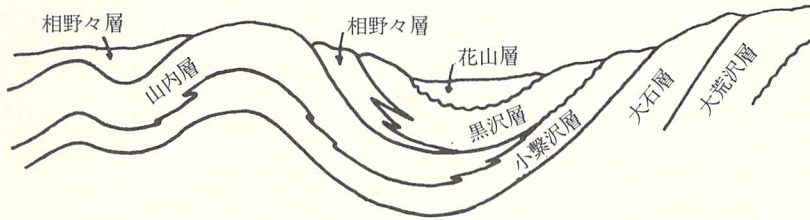
奥羽脊梁山脈は、東北地方を450kmにおよび南北に連なる一大山脈である。それはユーラシアプレートと太平洋プレートの境界である日本海溝にほぼ並行しており、プレート押力の結果として生じた大きな背斜構造としてとらえられるが、細かくみればそれぞれ地形的山脈と対峙した雁行配列を示す小単位の背斜構造に分解される。たとえば、遺跡の位置する湯田町が含まれる地域は、南に向かって高度を下げる西側の和賀岳、割倉山背斜から逆に高度を上げる荒沢森背斜へ脊梁山脈の移行部にあたる。両背斜間には花山向斜が存在し、平鹿盆地と呼ばれる地形的凹地に対応する(第3図)。なお、このような構造的特徴は、当地域に奥羽脊梁山脈中最も低い分水界(285m)が存在することと無関係ではなかろう。河川の流向も地質構造の支配をうけている。北上川の主要支流の一つである和賀川は、その下流部において上記移行部の相対的低地を東西方向に流れる。荒沢森背斜を横切る和賀仙人では先行谷的性格の峡谷を形成している。一方、上流部では構造軸に並行に南流する。

湯田町付近の地質分布を示すと(第4図)、背斜部は主に第三系中新統下部、大荒沢層、大石層、小繫沢層などのグリーンタフ系の凝灰質岩による構成される。向斜部、平鹿盆地には、前記のグリーンタフ系の凝灰質岩を基盤として、砂岩を主とする中新統上部の黒沢層、同じく砂岩を主とする中新統上部～鮮新統の花山層が堆積する。これらを不整合に被い未固結の砂礫、粘土を主とする亜炭化した泥炭層を伴う第四系の花山層が堆積する。芳沢層は扇状地堆積物の層相を呈する。

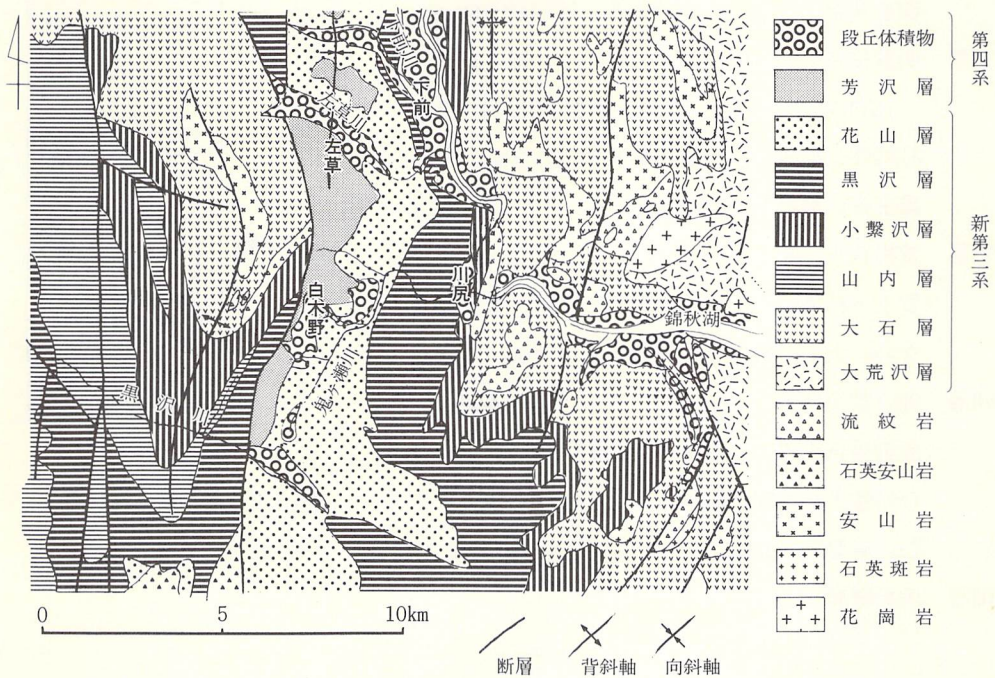
3 基本層序(第5図)

調査区内では、基本的には図のような層序が観察されるが、概してIV層以下は小礫から巨大な礫を多量に含む段丘礫層に相当する。調査区の東側と南側の大半は湧水が激しく、草木根により形成される腐植土に被われる表土直下は礫層である。

W ————— 割倉山背斜 ————— 平鹿盆地 ————— 脊梁山脈 E



第3図 平鹿盆地の東西両縁部を含む東西断面図 (長谷地質調査事務所 (1983))



第4図 平鹿盆地付近の地質図 (長谷地質調査事務所(1981)による)

I層 黒褐色土(10YR2/2) 表土。植物遺体の腐植土が卓越し、涌水の多い地区(南側)では保水性に富み、IV層上面に堆積し湿地帯を形成する。調査区の山林部(東側と南側)、西側の畑地に見られる。軟らかい。層厚10~30cm。

II層 黒褐色土(10YR2/3) シルト。畑地で卓越し、耕作により攪乱を受けるところも見られる。やや軟らかく、小礫を含む。層厚10~30cm。遺物包含層。

III層 明黄褐色土(10YR6/6) 粘性質シルト。小礫を含む。遺構検出面。層厚20~30cm。

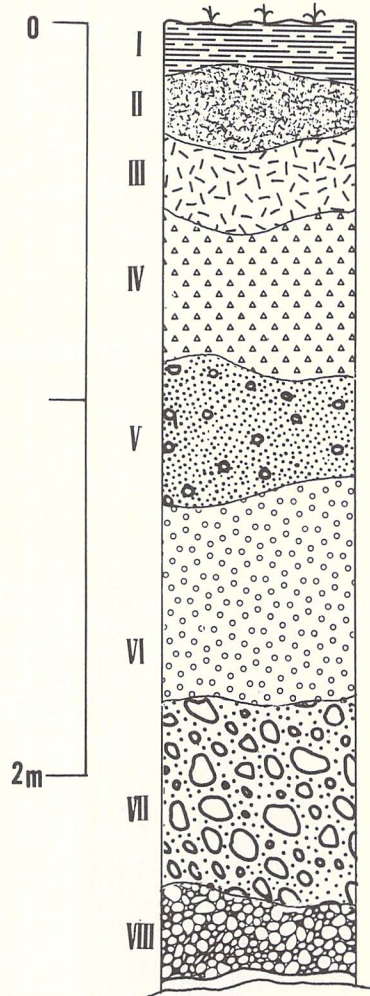
IV層 明黄褐色土(10YR6/8) 砂質を含む粘性土。鈍い黄褐色土(10YR5/4)粘性土が混入し、大小の礫を多量に含む。固く締まる。層厚40~60cm。

V層 明黄褐色土(10YR5/6) 粘性土。鈍い黄橙色(10YR7/2)の砂質土、鈍い黄褐色土(10YR5/4)粘性土混入し、大小の礫を多量に含む。固く締まる。層厚30~40cm。

VI層 黄褐色土・褐灰色土(10YR5/8・10YR6/1) 砂質土・粘性土が、斑状に混じる。やや締まりがない。大小の礫を多量に含む。層厚60~70cm。

VII層 鈍い黄褐色土(10YR5/4) 粘性土。明褐色土・灰黄褐色土(7.5YR5/8・10YR5/2)の砂質土を含む粘性土が筋状に混じる。大小の礫を多量に含む。層厚50~80cm。

VIII層 段丘礫層



第5図 基本層序柱状図

4 周辺の遺跡 (第6図)

岩手県遺跡台帳によれば、湯田町では現在までに51の遺跡が登載されている。このうち発掘調査された代表的な遺跡は、大台野遺跡である。大台野遺跡は旧石器時代から弥生時代までの複合遺跡であるが、県内において調査された旧石器時代の代表的遺跡であり、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、搔器など1万余点が出土している。

平成3年度より東北横断自動車道秋田線建設事業に伴い14遺跡の緊急発掘調査が開始された。

平成3～5年度まで調査された大渡II遺跡は旧石器時代のキャンプサイト跡から発見された。遺跡では年代判定の鍵層となるAT火山灰が泥炭層内に5～10mmの厚さでレンズ状に介在しているのが検出され、堆積層から旧石器、加工痕のある木製品、泥炭層から自然遺物、昆虫遺体などが出土している。石器や炭化物粒を伴う遺物集中区18ヶ所（石器・炭化物粒の共伴地区11ヶ所）は、泥炭層と旧河道の間の平坦地部分で、AT火山灰の上下から旧河道の縁に沿うように確認されている。

平成3・4年度調査では、越中畑IV遺跡で近世民家跡、越中畑V遺跡で近・現代の炭窯跡が検出されている。

平成4年度調査では、塚野II遺跡から縄文時代の陥し穴状遺構、土坑、旧沢跡が検出されている。白木野I遺跡では、縄文時代中期初頭の埋設土器遺構、大木6～7a式併行期の遺物が出土している。白木野II遺跡から近世（17世紀）掘立柱建物跡、近代（明治時代）の民家跡と庭、園池などの附属施設、陶磁器などの遺物が出土している。

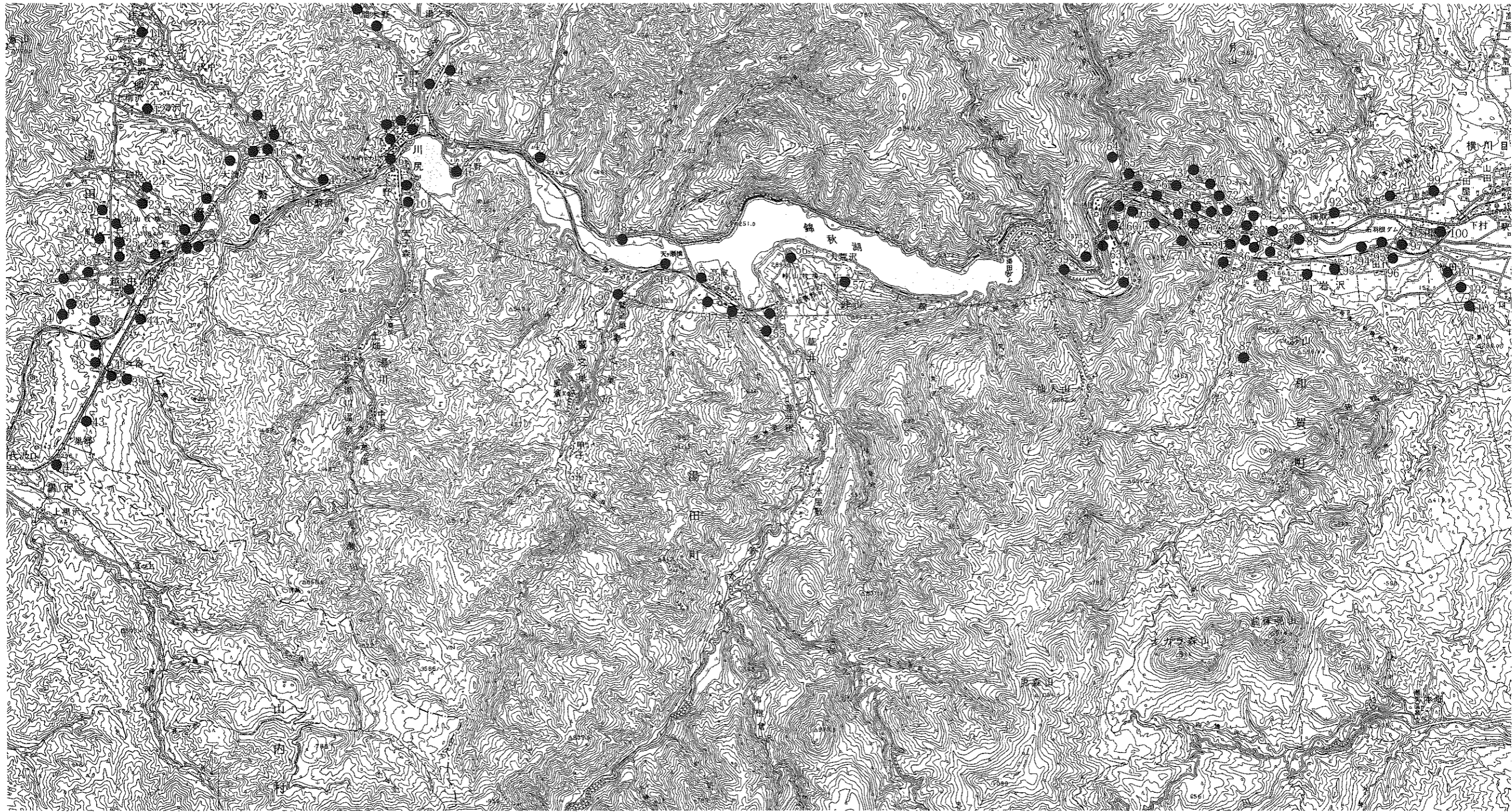
平成5年度調査では、上野々遺跡で縄文時代の陥し穴状遺構、近世の掘立柱建物跡が検出されている。上野々遺跡・本内I遺跡とも白木野II遺跡と同様の間取りを持つ近世（18～19世紀以降）の掘立柱建物跡が検出され、遺構の時期を示唆する陶磁器が出土している。

平成5・6年度調査遺跡は3カ所である。峠山牧場I遺跡は、遺物集中区、尖頭器、細石刃、舟形石核、台形様石器などの旧石器（約12,000年前）が出土している。耳取I遺跡は、遺物集中区とその周辺のソフトローム層より約2,000余点に及ぶ旧石器が出土し、尖頭器、ナイフ形石器、彫器との共伴が確認されたことは注目される。また、南西部より縄文時代前期後葉竪穴住居跡4棟が検出されている。本内II遺跡は、旧石器の搔器類2点が出土しているが、遺物集中区は確認されていない。南本内川に面する段丘上から縄文時代中期の大木8b式併行期の竪穴住居跡、その西側の水田地区から大木9・10・門前式併行期の竪穴住居跡が検出されている。また、遺物では早期の土器片、石器、土偶などの土製品、岩偶などの石製品が多量に出土している。

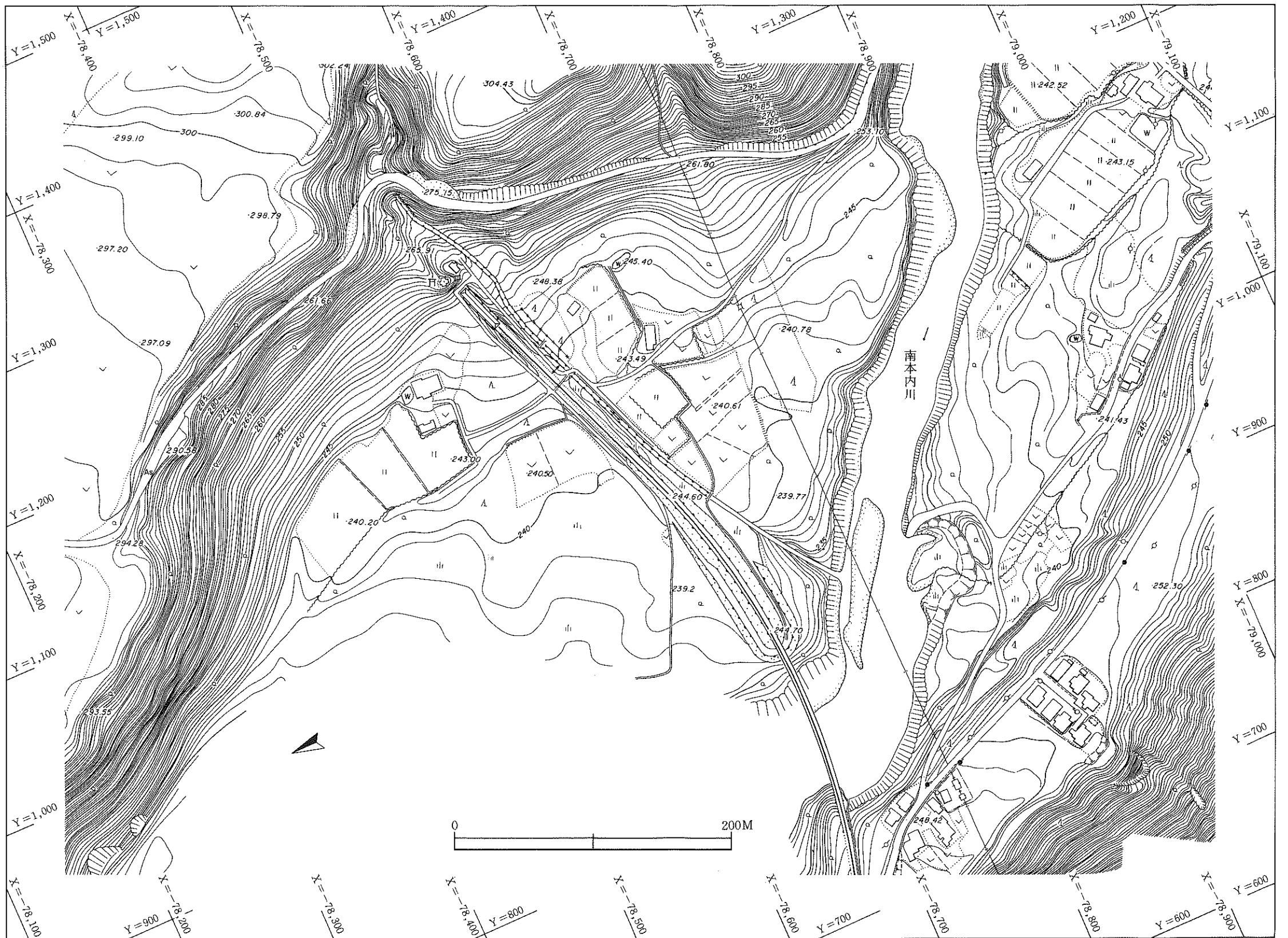
東北横断自動車道秋田線関連以外の記録では、『湯田町史』の掲載資料によると、湯田ダム湖底にある貝沢野地区で縄文時代早期の貝殻条痕文や圧痕文などの土器、尖頭器、トランシェ様石器などの石器が発見されている。清水ヶ野地区では、前期の大木系土器、石器のほかに板状土偶が発見されている。湯本小学校学区から中期の大木系土器、石器、石錘、石冠、硬玉大珠が発見されている。坂本地区では配石遺構と思われる石棒の立石が確認されている。後期では大沓遺跡で土器、スタンプ状土製品、土偶、石刀などが出土している。弥生時代の遺物は希薄であるが、和賀川沿いで見られ、大台野遺跡、野々宿遺跡などがある。古墳時代以降については、土師器、須恵器、メノウの勾玉など、断片的な遺物資料が見られる。

周辺の遺跡(1)

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1	間木野Ⅰ	散布地	旧石器	和賀郡湯田町第30地割24	(昭和59年調査)
2	間木野Ⅱ	散布地	旧石器	和賀郡湯田町第30地割24	(昭和59年調査)
3	大沓Ⅰ	散布地	縄文土器(中期) 石器	和賀郡湯田町第36地割63番地2	
4	大沓Ⅱ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第36地割27番地2	
5	川尻Ⅰ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町	
6	川尻Ⅱ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町	
7	館跡	集落跡	縄文土器(前期～中期) 石器	和賀郡湯田町第40地割166番地5	損壊
8	川尻館跡	館跡		和賀郡湯田町第40地割149番地	
9	上野々Ⅰ	狩場・集落跡	旧石器 縄文土器 近世民家	和賀郡湯田町第39地割	平成5年調査
10	上野々Ⅱ	散布地		和賀郡湯田町第39地割	
11	芳が沢 一里塚	史跡	塚 1基	和賀郡湯田町芳が沢	(昭和59年調査)
12	柳沢Ⅰ	散布地	縄文土器	和賀郡湯田町下柳沢第70地割80番地1	
13	落合	散布地	縄文土器	和賀郡湯田町第56地割15番地	
14	小繫沢Ⅰ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町小繫沢	
15	小繫沢Ⅱ	散布地	旧石器 石器	和賀郡湯田町第56地割15番地	
16	塚野Ⅰ	散布地	土坑 縄文土器 石器	和賀郡湯田町第55地割145番地88	平成4年調査
17	塚野Ⅱ	散布地	土坑 陋し穴 縄文土器 石器	和賀郡湯田町第55地割157番地11	平成4年調査
18	大渡Ⅰ	散布地	旧石器	和賀郡湯田町第57地割37番地15	平成4年調査
19	大渡Ⅱ	キャンプ跡?	旧石器 縄文土器 石器	和賀郡湯田町第57地割12番地1	平成3・4・5年調査
20	大渡Ⅲ	キャンプ跡?	旧石器 炭化物	和賀郡湯田町第57地割40番地	
21	大渡Ⅳ	集落跡	縄文土器	和賀郡湯田町第57地割	
22	細内Ⅰ	散布地	化石	和賀郡湯田町第69地割66番地	
23	細内Ⅱ	キャンプ跡?	旧石器	和賀郡湯田町第69地割	
24	白木野Ⅰ	散布地	剥片石器	和賀郡湯田町第67地割265番地5	平成4年調査
25	白木野Ⅱ	集落地	近世民家 陶磁器	和賀郡湯田町第67地割150番地	平成4年調査
26	白木野Ⅲ	散布地	掘立柱建物跡 陶磁器	和賀郡湯田町第67地割6番地2	平成4年調査
27	白木野Ⅳ	散布地	旧石器 石刃	和賀郡湯田町第67地割262番地	
28	白木野Ⅴ	散布地	旧石器 彫刻刀 石刃	和賀郡湯田町第67地割315番地	
29	白木野Ⅵ	キャンプ跡?	旧石器 剥片 炭化物粒	和賀郡湯田町第67地割	
30	大台野	集落跡	旧石器～弥生 石器	和賀郡湯田町第68地割253番地	昭和45～57年調査
31	大台野Ⅱ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第68地割	
32	越中畑Ⅰ	散布地	縄文土器	和賀郡湯田町第64地割	
33	越中畑Ⅱ	散布地	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第64地割	
34	越中畑Ⅲ	散布地	縄文土器	和賀郡湯田町第64地割	
35	越中畑Ⅳ	散布地	掘立柱建物跡 溝跡 陶磁器	和賀郡湯田町第64地割65番地	平成4年調査
36	越中畑Ⅴ	散布地	炭窯 土坑 溝跡 焼土 石器	和賀郡湯田町第64地割133番地16	平成3・4年調査
37	越中畑待幡所跡	番所跡		和賀郡湯田町第64地割100番地	
38	野々宿北	散布地	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第64地割207番地	
39	野々宿Ⅰ	集落跡	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第60地割50番地	
40	野々宿Ⅱ	散布地	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第62地割90番地	
41	野々宿Ⅲ	キャンプ跡?	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第67地割77番地	
42	巢郷Ⅰ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第63地割	
43	巢郷Ⅱ	散布地	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第63地割10番地	
44	中村	散布地	旧石器 剥片石器	和賀郡湯田町第59地割52番地	
45	合野々	散布地	旧石器 土器片	和賀郡湯田町第55地割84番地	
46	川尻中学校	散布地	縄文土器(中期) 石器	和賀郡湯田町第41地割59番地	損壊
47	廻戸	散布地	縄文土器(中・後期) 石刃 剥片	和賀郡湯田町	
48	安倍館跡	館跡	古代? (伝承地)	和賀郡湯田町	
49	八幡館跡	館跡	古代? (伝承地)	和賀郡湯田町第41地割	
50	鷹ノ巣	散布地	縄文土器(中期) 石鏃 石匙	和賀郡湯田町第50地割101番地	
51	耳取Ⅰ	集落地	縄文住居跡 旧石器	和賀郡湯田町第49地割	平成5・6年調査
52	耳取Ⅱ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第49地割	
53	耳取Ⅲ	散布地	縄文土器 石器	和賀郡湯田町第49地割	
54	本内Ⅰ	集落跡	近世掘立柱建物跡	和賀郡湯田町第47地割5-1	平成5年調査
55	本内Ⅱ	集落跡	縄文住居跡 近世焙焼炉	和賀郡湯田町第47地割5-1	平成5・6年調査



第6図 周辺の遺跡分布図



第7図 遺跡周辺の地形図

周辺の遺跡(2)

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
56	峠山牧場Ⅰ	集落跡	旧石器	和賀郡湯田町第46地割	平成5・6年調査
57	峠山牧場Ⅱ	散布地		和賀郡湯田町第46地割	
58	夏畑Ⅰ	散布地	旧石器 縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第8地割	
59	夏畑Ⅱ	散布地	石器	北上市和賀町仙人第2・8地割	
60	和賀仙人	散布地	旧石器	北上市和賀町仙人第1地割	昭和40・41年調査
61	和賀仙人北	散布地	篋状石器	北上市和賀町仙人第1地割	
62	和賀仙人南	散布地	石匙 尖頭器	北上市和賀町仙人第2地割	
63	和賀仙人西	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第2地割	
64	本内	散布地	縄文土器	北上市和賀町仙人第8地割	
65	土場	散布地	狩り場跡 土坑 陥し穴	北上市和賀町仙人第8地割	
66	ぼうず山	散布地	旧石器 縄文土器 石器	北上市和賀町仙人第1地割	
67	切留Ⅰ	散布地	縄文土器(中・後期) 石器	北上市和賀町仙人第4地割	
68	切留Ⅱ	散布地	縄文土器(中・後期)	北上市和賀町仙人第5地割	
69	切留Ⅲ	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第5地割	
70	切留Ⅳ	散布地	縄文土器 石器	北上市和賀町仙人第6地割	
71	切留Ⅴ	散布地	旧石器 石器	北上市和賀町仙人第5地割	
72	人当Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第9地割	平成3年調査
73	人当Ⅱ	散布地	縄文土器	北上市和賀町仙人第8地割	
74	人当Ⅲ	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第8地割	
75	人当Ⅳ	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町仙人第8地割	
76	仙人駅前	散布地	縄文	北上市和賀町仙人第4地割	
77	根洗沢	散布地	旧石器	北上市和賀町仙人第1地割	
78	赤石Ⅰ	散布地	縄文土器 剝片石器	北上市和賀町仙人第9地割	
79	赤石Ⅱ	散布地	縄文土器(晩期)	北上市和賀町仙人第9地割	
80	法ヶ沢Ⅰ	散布地	縄文土器 石匙 石斧	北上市和賀町岩沢第9地割	
81	法ヶ沢Ⅱ	散布地	石器	北上市和賀町岩沢第8地割	
82	下岩沢Ⅰ	集落跡	土坑 縄文・弥生土器	北上市和賀町岩沢第9地割	
83	下岩沢Ⅱ	散布地	縄文土器 剝片石器	北上市和賀町岩沢第8地割	
84	下岩沢Ⅲ	散布地	縄文土器(晩期) 剝片石器	北上市和賀町岩沢第8地割	
85	下岩沢Ⅳ	散布地		北上市和賀町岩沢第8地割	
86	下岩沢Ⅴ	散布地	縄文土器(晩期) 剝石器	北上市和賀町岩沢第8地割	
87	水沢館跡	館跡	中世	北上市和賀町岩沢第8地割	
88	岩沢Ⅰ	散布地	縄文土器(後・晩期) 石器	北上市和賀町岩沢第9地割	
89	岩沢Ⅱ	散布地	縄文土器(後・晩期) 石器	北上市和賀町岩沢第9地割	
90	岩沢Ⅲ	散布地	縄文土器(中期) 剝片石器	北上市和賀町岩沢第8地割	
91	上山田塚跡	塚跡		北上市和賀町岩沢第10地割	
92	鳥谷森	散布地	縄文土器(晩期) 剝片石器	北上市和賀町横川目字鳥谷森	
93	下仙人	散布地	縄文土器 剝片石器	北上市和賀町岩沢第9地割	
94	下仙人館(別名岩沢館)	館跡	縄文土器 陶器 石器	北上市和賀町岩沢第9地割	
95	御前淵	散布地	縄文土器(中期)	北上市和賀町山口第15地割	
96	泉	散布地	縄文土器 須恵器	北上市和賀町山口第13地割	
97	田代	散布地	縄文土器(晩期) 石錘 石皿 石棒	北上市和賀町山口第14・15地割	
98	愛宕山	散布地	旧石器	北上市和賀町横川目第5地割	平成1・2・3年調査
99	田屋	散布地	縄文土器(晩期)	北上市和賀町横川目第6地割	
100	吉沢	散布地	縄文土器	北上市和賀町横川目第8地割	
101	福田	散布地	縄文土器(中・晩期) 石器	北上市和賀町山口	
102	小吹野	散布地	縄文土器~弥生土器 石器	北上市和賀町山口第18地割51番地~58番地	平成5年調査
103	馬場館	散布地	縄文土器~弥生土器 石器	北上市和賀町山口第18地割51番地~60番地	平成5年調査

III 調査方法と整理方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定 (第8図)

調査区は、道路建設予定地に沿って東から西へ緩やかな曲線を描いている。調査区の設定は、基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域の西側に基準点1、東側に基準点2をそれぞれ設定した。

本内I遺跡、基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、杭高は以下のとおりである。

基準点1 $X = -78,660.000\text{m}$ $Y = 1,140.000\text{m}$ $H = 243.830\text{m}$

基準点2 $X = -78,660.000\text{m}$ $Y = 1,220.000\text{m}$ $H = 248.788\text{m}$

グリッドの設定にあたって、基準点1・基準点2を結ぶ直線を基軸線とし、基軸線上を基準線1から西に40m進み、更に基軸線に直交する線上を北へ80m進んだ点を原点とした。原点より基軸線に平行ないし直交するように40×40mの大区画を設定し、更に大区画を4×4mごと区切って小区画とした。

グリッドの呼称は南北方向がアルファベットを用い、大グリッド名にA～E、小グリッド名にa～jを与え、東西方向が数字を用い、大グリッド名にローマ数字のI～V、小グリッド名に算用数字の1～0までを与えた。グリッドはそれらの組合せにより、IA1a、IIB0jなどのように呼称した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査開始当初、それぞれの調査区において2m幅の試掘トレンチを設定し、表土の厚さ、遺構の存在の有無、遺物の分布状況などの把握を行った。その結果、調査区の東側斜面と南側の大半が崖錐性の礫に覆われ、かつ湧水が激しく、遺構の存在の可能性が極めて少ないことが予想された。このことから、南側の湧水地区と東側の山林部は重機による2m幅の試掘トレンチによる調査を行ったが、遺構は確認されなかった。調査区北側と西側の畑地では、少量の土器片が出土するものの遺物量が極めて少ないため、褐色土上面まで重機による表土除去を行った。その後、人力によって掘り下げ、遺構検出を行った。

発掘調査にあたっては、調査区域外に土捨て場を確保出来ないため、遺構のない区域に埋め戻して調査を行った。

(3) 遺構の命名

検出された遺構は、その検出面が本来の構築面を示すものではない。遺構名は、遺構が同一グリッドに集中することから、検出順に命名した。

(4) 精査と実測

掘立柱建物跡の柱穴、溝跡などは2分法で精査を行った。遺構の実測図にあたっては、平面実測はグリッド軸に合わせて1mメッシュを基本とする簡易的な遣い方を設定し、標高の計測はレベルを用いて行った。遺構の実測図は20分の1の縮尺で行った。基本層序はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7cm判モノクロ1台を使用した。

2 室内整理

(1) 遺物整理

遺物の処理は、野外調査と並行して、水洗・注記・接合・復元を行った。室内整理では報告書掲載の遺物を選び、種類別に登録番号を付し、実測・トレース・拓影写真撮影・遺物図版作成の順に作業を行った。

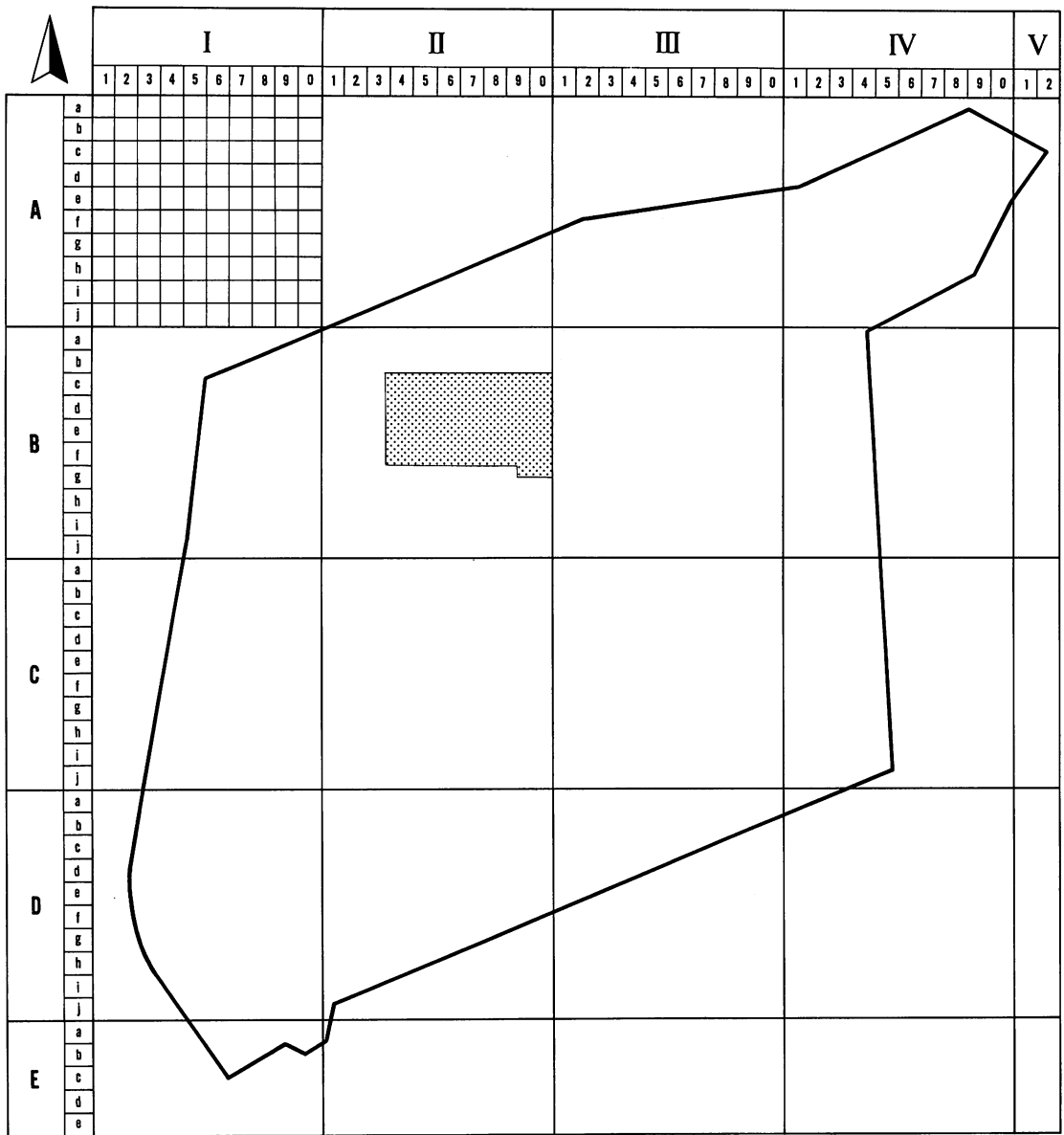
(2) 遺構図面

野外調査で作成した図面を点検・修正後、必要に応じて合成し、報告書掲載用に第2原図を作成した。その後、トレース・遺構図版作成の順に作業を行った。

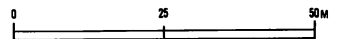
(3) 図版

遺構実測図の縮尺は、掘立柱建物跡、溝跡は100分の1、溝断面は40分の1とし、方位は磁北を示した。

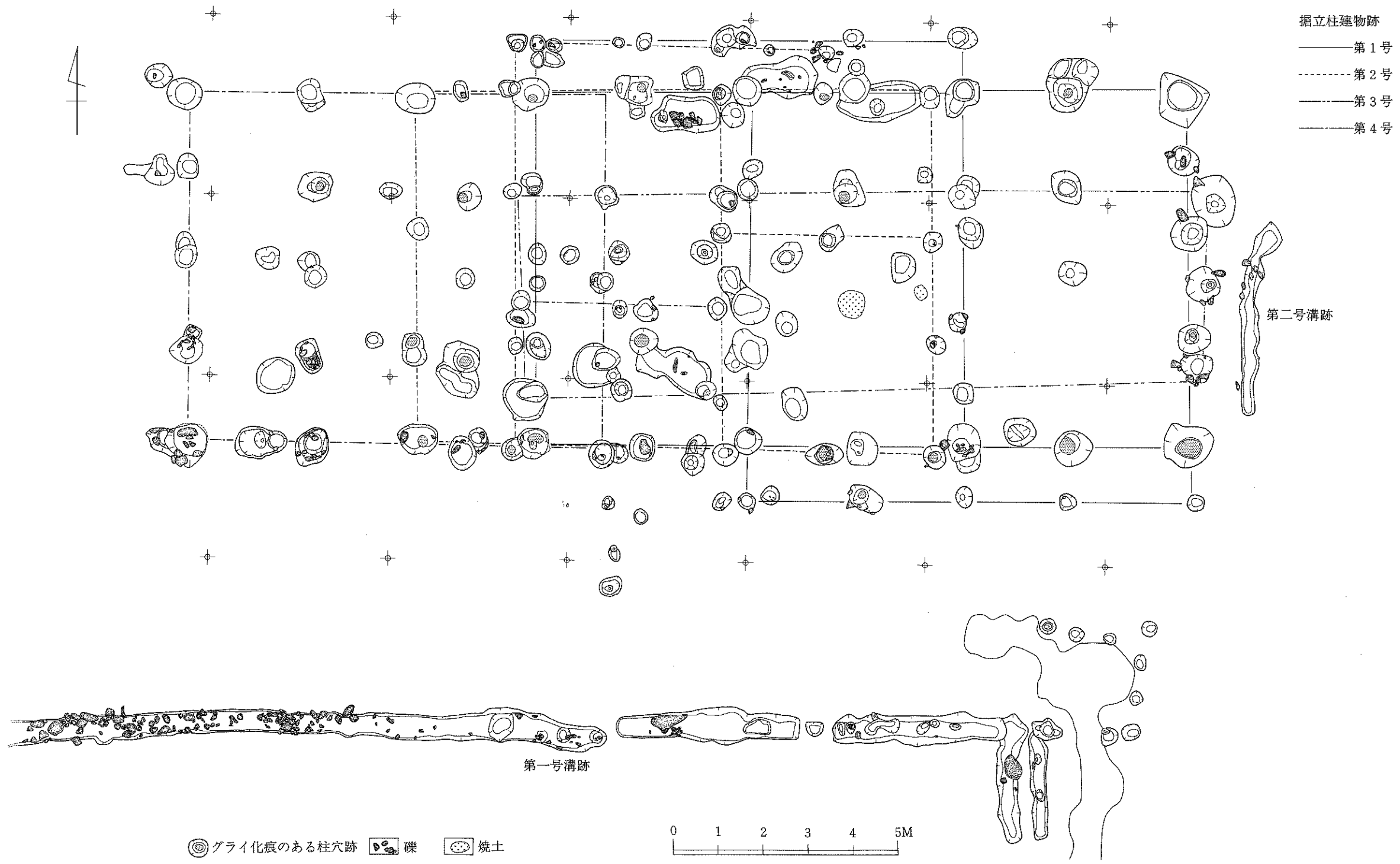
遺物実測図の縮尺は、土器拓影は2分の1、石器は剥片石器が2分の1・3分の1、陶磁器は2分の1、土製品・古銭・木製品が2分の1である。遺物に付した番号は、土器・石器・土製品・木製品は各種別に連番とした。写真図版は遺構、遺物ともに縮尺は不定である。図版番号と写真図版番号は同一である。



掘立柱建物跡群



第8図 グリッド配置図



第9図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、近世の掘立柱建物跡4棟、溝跡2条、付属施設と思われるもの1カ所、その他建物跡に組めない柱穴状ピットである。遺構群は、調査区北側のII B 4 c—4 g～III C 1 c—1 gグリッドの範囲から重複して検出されている。

1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は4棟検出されているが、このうち母屋と考えられるもの3棟、それに付随する小屋と考えられるもの1棟である。母屋と考えられる建物跡3棟は、ほぼ同じ位置から重複して検出され、それらが時期差を持っていることを示している。建物跡には、出入口、炊事場、カマドなどの屋内施設が備わっていたと思われる。建物跡群が検出された調査区域からは、陶磁器片が出土している。

第1号掘立柱建物跡（第10図 写真図版3）

[位置] 調査区II B 6 c～6 eグリッドからII B 0 c～0 eグリッドの範囲に位置する。

[検出面] 第III層上面である。

[規模] 延床面積は111.65㎡（約34坪）であり、ほぼ真南を向いている。

[形状] 3間×6間の直屋であり、北側と南側に下屋がついている。間取りは下手と真中に梁行いっぱいの部屋を取り、上手には1間×2間と2間×2間の部屋があり、いわゆる「広間型三間取り」の間取りを呈する。建物跡の四方角の柱穴跡はやや太く比較的深い。

[主軸方向] 梁行の軸方向はN—1°—Wである。

[柱穴] 平面形が不整の円形ないしやや楕円形を呈する。規模が径45×50cmから100×106cm、深さ15～88cmである。埋土は、軟らかい黒褐色のシルト質土が主体であり、壁際に柱穴の押さえにいられたと思われる黄褐色の固い粘土が観察できるものもあり、こぶし大の礫から小礫、焼土や炭化物が混入するものもある。下屋の柱穴は、平面形が不整の円形を呈する。規模が径25×30cmから50×50cm、深さ10～59cm、埋土が軟らかい黒褐色のシルト質土が主体である。柱穴跡の底面がグライ化し、変色している柱穴痕が観察されるものもある。

[柱間寸法] 桁行は6尺6寸（約200cm）、梁行は8尺3寸（約250cm）である。北側の母屋と下屋の桁行は4尺（約120cm）、南側の母屋と下屋の桁行は4尺6寸（約140cm）である。

[出土遺物] 柱穴内から出土していないが、遺構のある区域より陶磁器片が出土している。

[付属施設] 屋内施設が備わっていたと思われるが、不明である。

[建物の性格] 規模と位置、構造から母屋と思われる。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡の構造及び区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

第2号掘立柱建物跡（第11図 写真図版3）

[位置] 調査区II B 6 c～6 eグリッドから0 c～0 eグリッドの範囲に位置する。

[検出面] 第III層上面である。

[規模] 延床面積は86.25㎡（約26坪）である。

[形状] 掘立柱建物跡である。3間×5間の直屋であり、北側に下屋がついている。間取りは上手と真中に梁行いっぱいの部屋を取り、下手には2間×2間と1間×2間の部屋があり、いわゆる「広間型三間取り」の間取りを呈する。

[主軸方向] 梁行の軸方向はN—1°—Wであり、ほぼ真南を向いている。

[柱穴] 平面形が不整の円形ないしやや楕円形を呈する。規模が径30×50cmから80×90cm、深さ30～68cmである。埋土は、軟らかい黒褐色のシルト質土が主体であり、壁際に柱穴の押さえにいられたと思われる黒褐色の固い粘土が観察できるものもあり、こぶし大の礫から小礫、焼土や炭化物が混入するものもある。下屋の柱穴は、平面形は不整の円形である。規模が径20×25cmから35×40cm、深さ18～20cm、埋土が軟らかい黒褐色のシルト質土が主体である。柱穴跡の底面がグライ化し、変色している柱穴痕が観察されるものもある。

[柱間寸法] 桁行は8尺（約240cm）、梁行は7尺6寸（約230cm）である。北側の下屋は7尺6寸（約230cm）である。母屋と下屋の桁行は3尺3寸（約100cm）である。

[出土遺物] 柱穴内から出土していないが、遺構のある区域より陶磁器片が出土している。

[付属施設] 屋内施設が備わっていたと思われるが、不明である。

[建物の性格] 規模と位置、構造から母屋と思われる。

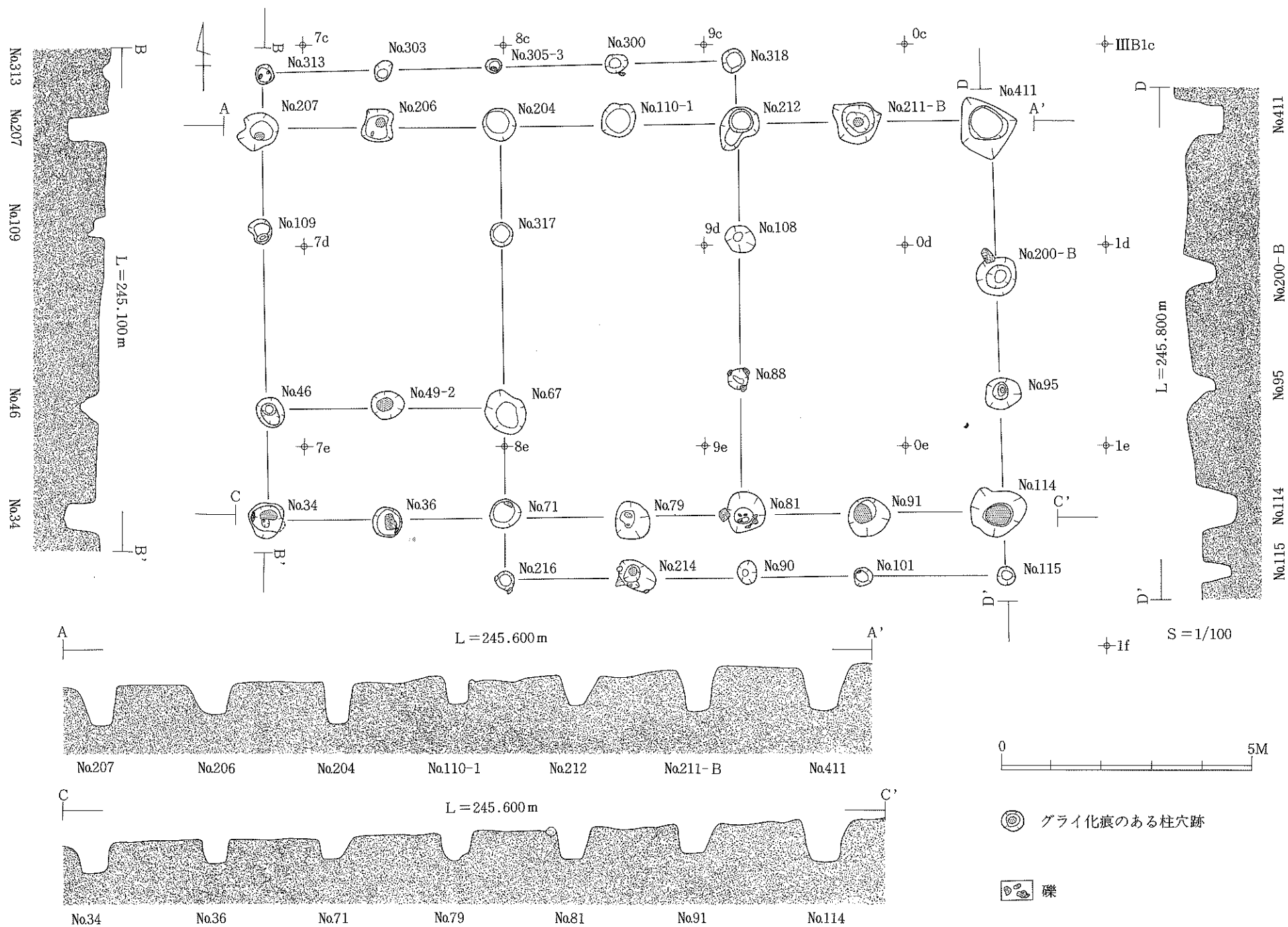
[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡の構造及び区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

第3号掘立柱建物跡（第12図 写真図版3）

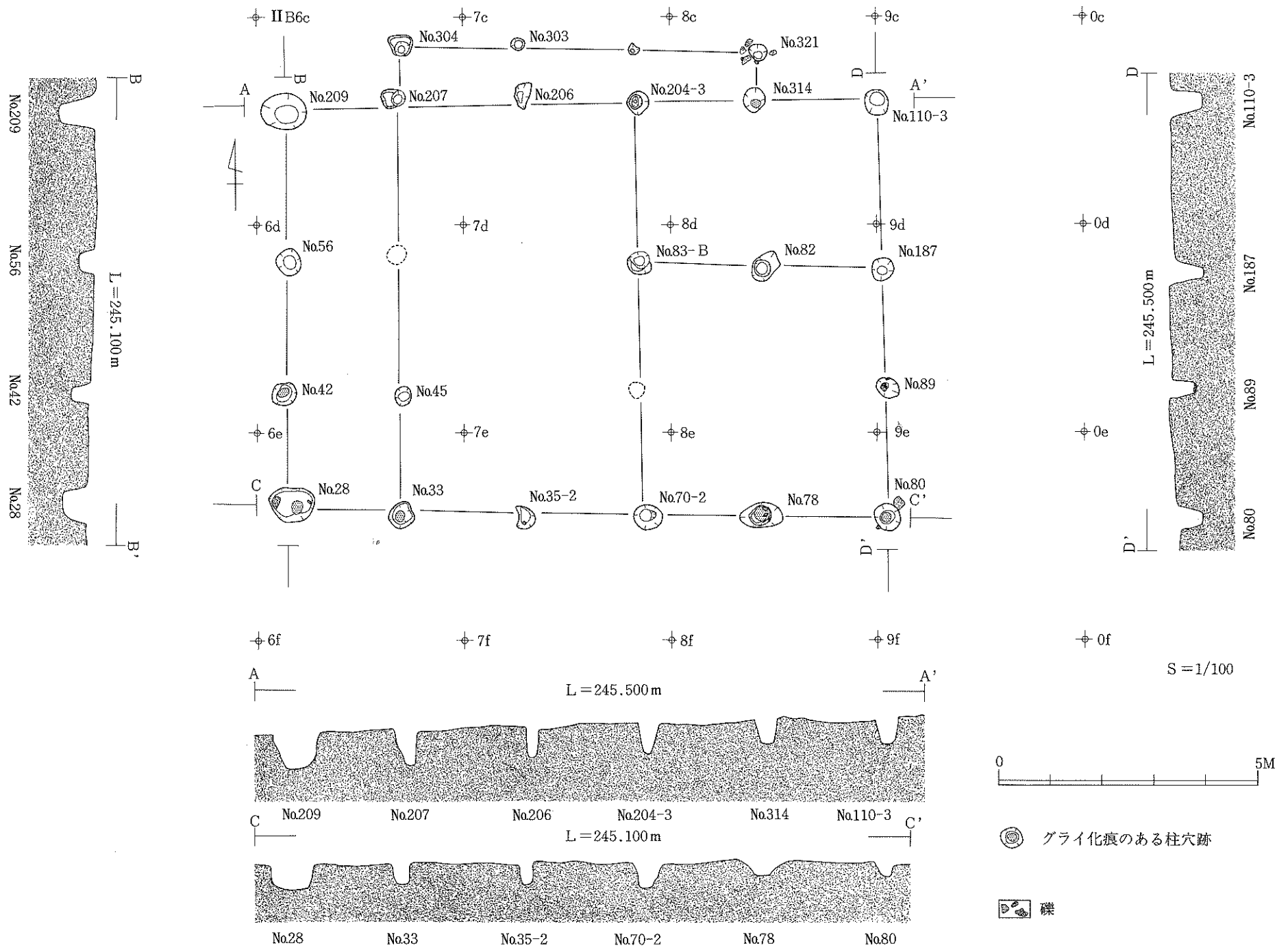
[位置] 調査区II B 6 d～6 eグリッドから0 d～0 eグリッドの範囲に位置する。

[検出面] 第III層上面である。

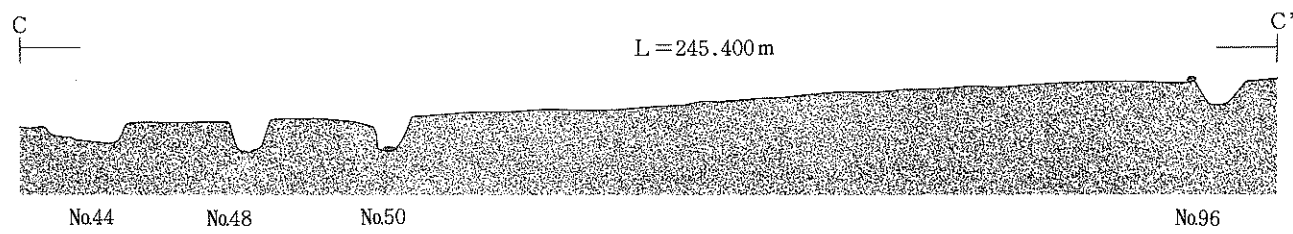
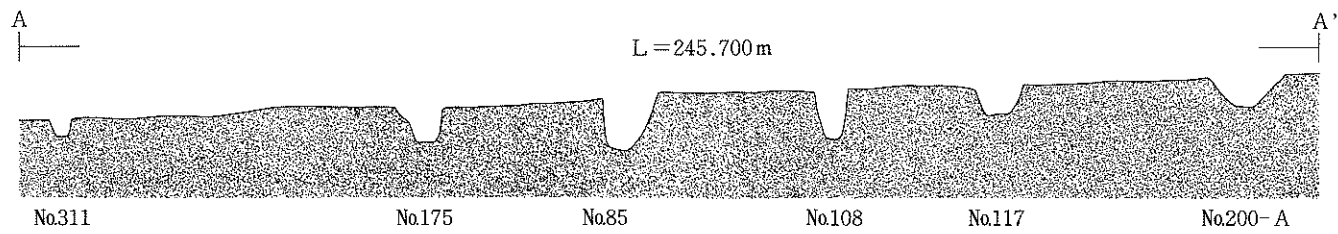
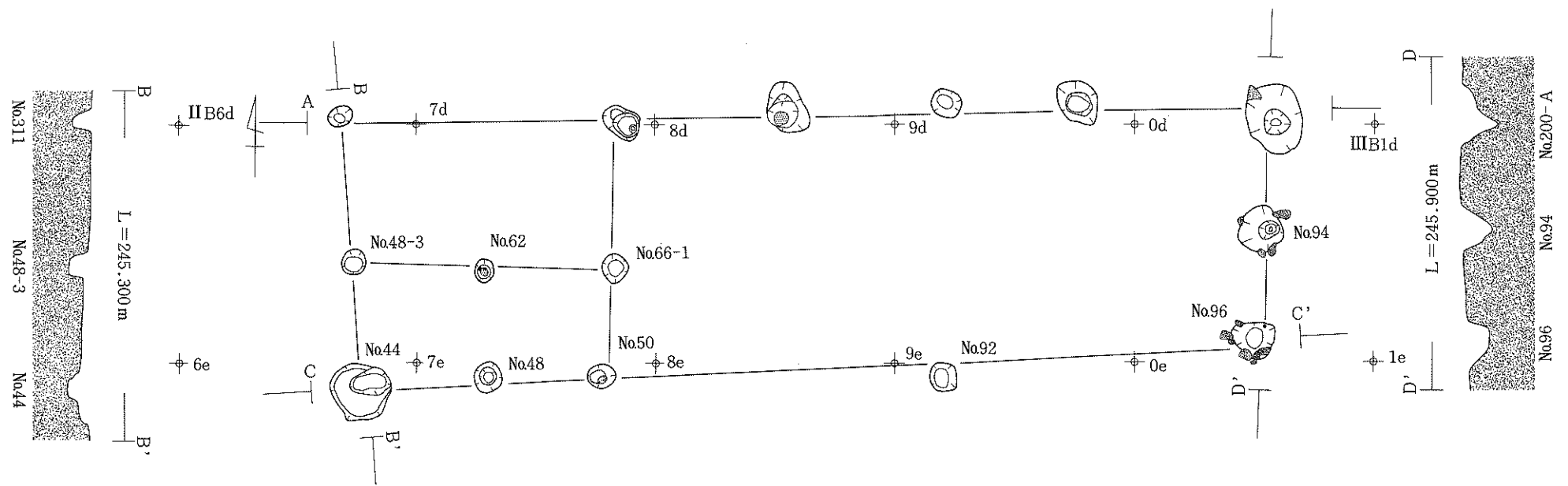
[規模] 延床面積は66.6㎡（約20坪）である。



第10図 第1号掘立柱建物跡

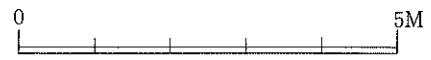


第11図 第2号掘立柱建物跡



S = 1/100

◎ グライ化痕のある柱穴跡 ☐ 礎



第12図 第3号掘立柱建物跡

[形状] 掘立柱建物跡である。2間×6間の直屋である。間取りは上手に梁行いっぱいの部屋を取り、下手には1間×2間と1間×2間の部屋がある。

[主軸方向] 梁行の軸方向はN-5°-Wであり、ほぼ真南方向を向いている。

[柱穴] 平面形が不整の円形からやや楕円形を呈し、規模が径20×80cmから93×114cm、深さ20～68cmである。埋土は、軟らかい黒褐色のシルト質土が主体であり、壁際に柱穴の押さえにいられたと思われる黄褐色の固い粘土が観察できるものもあり、こぶし大の礫から小礫、焼土や炭化物が混入するものもある。柱穴跡の底面がグライ化し、変色している柱穴痕が観察されるものもある。

[柱間寸法] 桁行は8尺(約240cm)、梁行は7尺3寸(約220cm)である。

[出土遺物] 柱穴内から出土していないが、遺構のある区域より陶磁器片が出土している。

[付属施設] 屋内施設が備わっていたと思われるが、不明である。

[建物の性格] 規模と位置、構造から母屋と思われる。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡の構造及び区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

第4号掘立柱建物跡(第13図 写真図版3)

[位置] 調査区II B 4 c～4 fグリッドから7 c～7 fグリッドの範囲に位置する。

[検出面] 第三層上面である。

[規模] 延床面積は70.68㎡(約21坪)である。

[形状] 掘立柱建物跡である。4間×5間の直屋である。間取りどおりに柱穴が配置される。

[主軸方向] 梁行の軸方向はほぼ真東を向いている。

[柱穴] 平面形が不整の円形を呈するものが多く、規模が径33×45cmから92×92cm、深さ24～65cmである。埋土は、軟らかい黒褐色のシルト質土が主体であり、壁際に柱穴の押さえにいられたと思われる黄褐色の固い粘土が観察できるものもあり、こぶし大の礫から小礫、焼土や炭化物が混入するものもある。柱穴跡の底面がグライ化し、変色している柱穴痕が観察されるものもある。

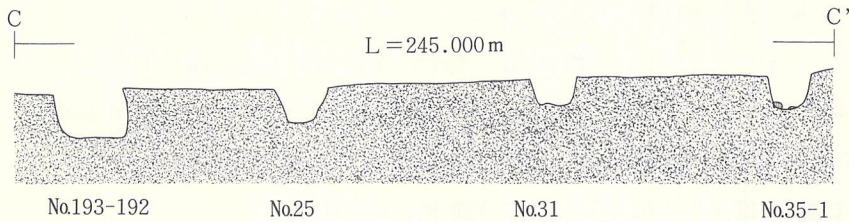
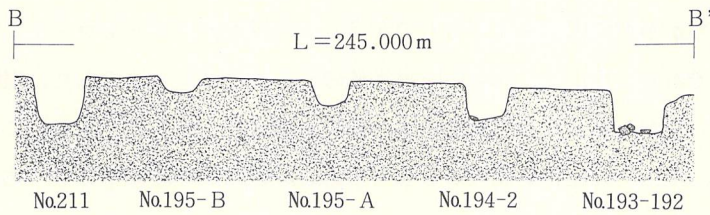
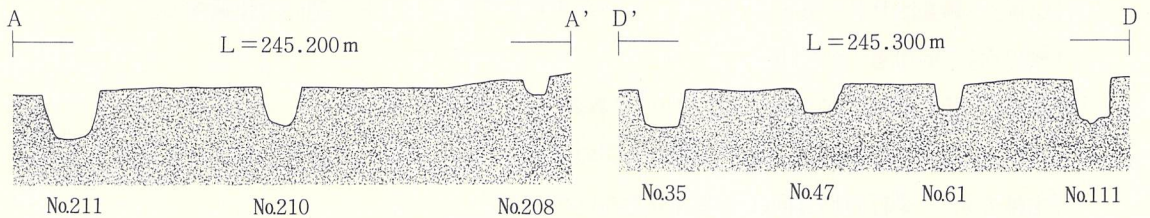
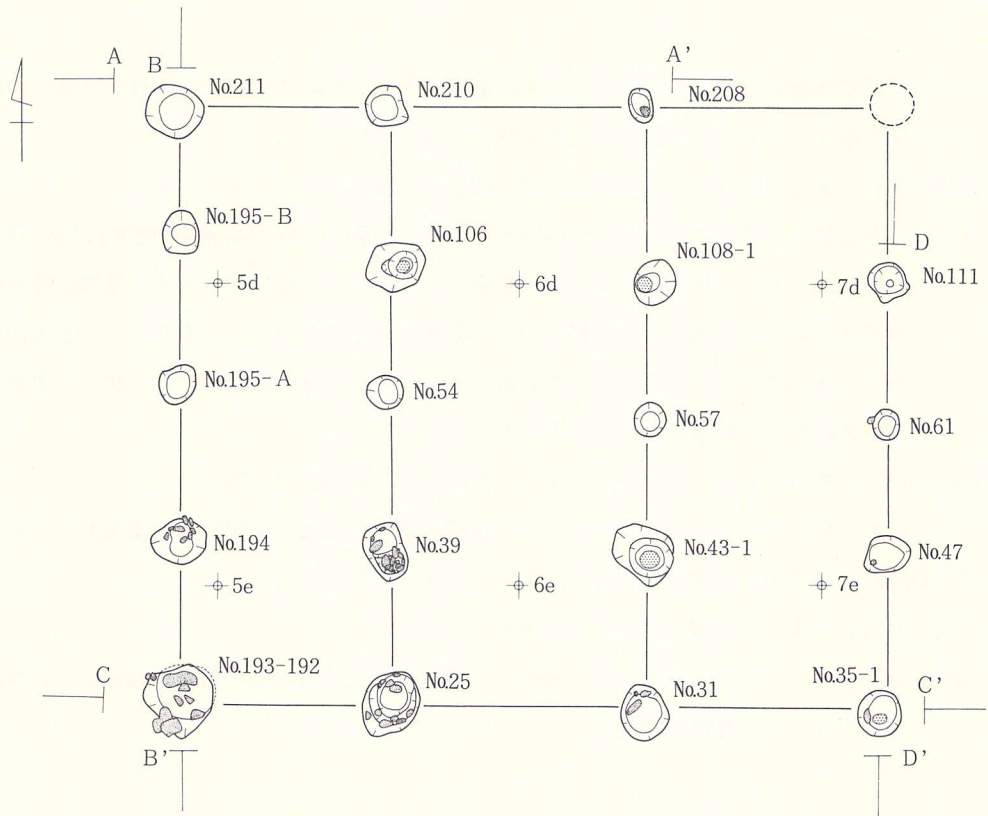
[柱間寸法] 桁行は9尺3寸(約280cm)、梁行は7尺3寸(約220cm)である。

[出土遺物] 柱穴内から出土していないが、遺構のある区域より陶磁器片が出土している。

[付属施設] 屋内施設が備わっていたと思われるが、不明である。

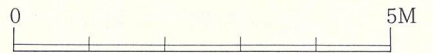
[建物の性格] 規模と構造から小屋状の建物跡と思われる。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡の構造及び区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

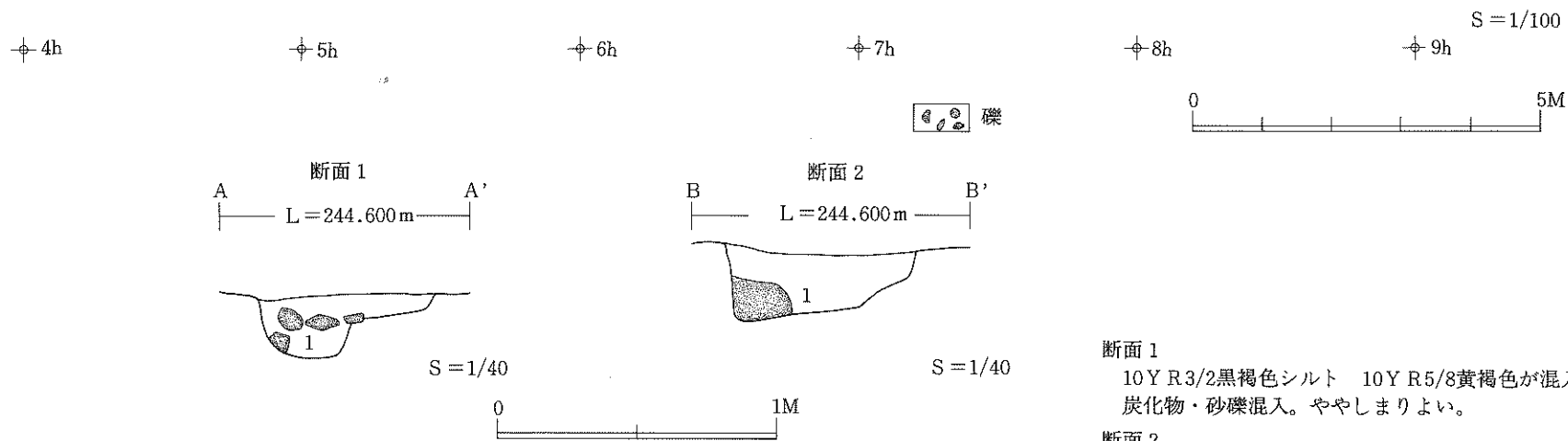
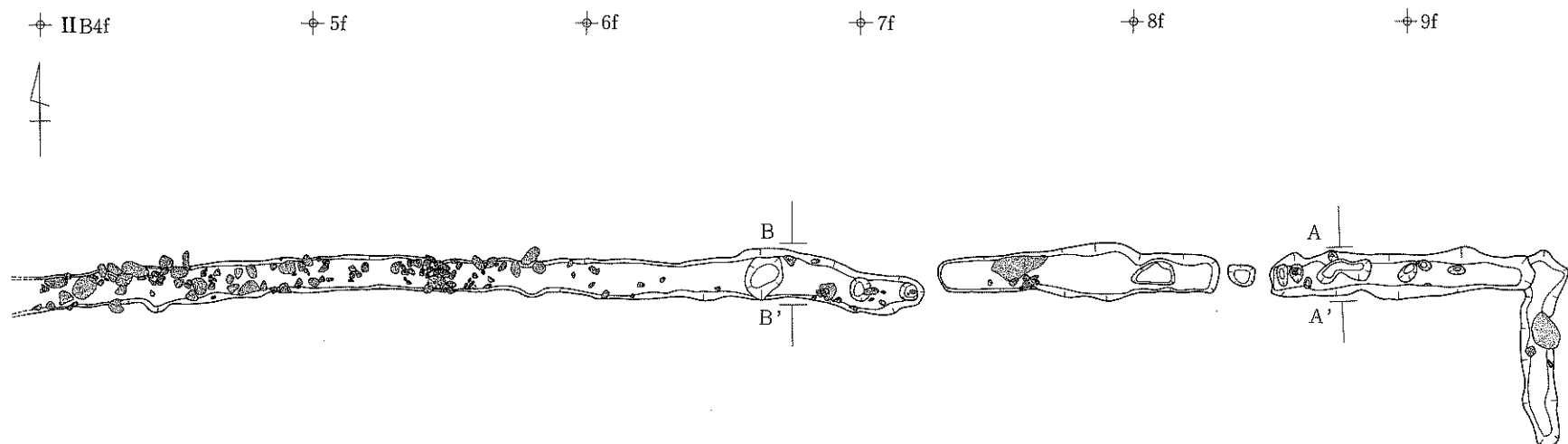


S = 1/100

◎ グライ化痕のある柱穴跡 ◻ 礎



第13図 第4号掘立柱建物跡



断面 1
 10 Y R3/2 黒褐色シルト 10 Y R5/8 黄褐色が混入。
 炭化物・砂礫混入。ややしまりよい。

断面 2
 10 Y R2/2 黒褐色シルト 10 Y R5/6 黄褐色が混入。
 砂礫混入。ややしまりよい。

第14図 第一号溝跡

2 溝 跡

溝跡は、調査区北側の掘立柱建物跡群付近に2条検出された。

第一号溝跡（第14図 写真図版3）

[位置] II B 3 f ~ 3 g グリッドから 0 f ~ 0 g グリッドの範囲で検出された。

[検出面] 第III層上面である。

[規模] 長さ約24 m 40cm、幅45~84cm、深さが西側で約4 cm、東側で約10cm、窪地状のところろが24~32cmである。

[形状] 溝跡は、東西に走り、西部で浅くなる。東側の 0 f ~ 0 g で南にほぼ直角に曲がる。底面は西側に向かって緩やかに傾斜する。

[埋土] やや締まりのある黒褐色のシルト質土が主体であり、黄褐色の粘性を持つ砂質土。こぶし大から小さい礫まで多量に混入し、凹凸が激しい。

[出土遺物] 遺構内及び周辺から出土していない。

[遺構の性格] 底面は、水の流れた痕跡は観察されず、排水の目的の溝とは考えにくく、礫が多量に散在し、大小の木根痕とみられる小径の窪地が不規則な方向に多数みられる。掘立柱建物跡に伴う、柴垣跡と思われる。規模と位置から、いずれかの建物跡の母屋に付属するものと思われる。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡に附随する施設であると思われ、区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

第二号溝跡（第15図 写真図版3）

[位置] 調査区 II B 0 d ~ 0 e グリッドの範囲で検出された。

[検出面] 第III層上面である。

[規模] 長さ約4 m 25cm、幅25~50cm、深さ6~17cmである。

[形状] 南北に走り、北部でやや東に「くの字」状に曲がる。底面の傾斜角は南側がやや下がり、凹凸が激しい。

[埋土] やや締まりのない黄褐色の粘土が主体であり、小さな礫が多量に混入する。

[出土遺物] 遺構内及び周辺から出土していない。

[遺構の性格] 底面の傾斜角が浅く、水の流れた痕跡は観察されず、規模や形状などから排水の目的の溝とは考えにくい。掘立柱建物跡と接触する箇所にあること、底面の凹凸が激しいことなどから、軒先からの雨垂れによってできたものと思われる。第1号または第3号掘立柱建物跡に関連すると思われる。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡に附随する施設であると思われる、区域内からの出土遺物から、18世紀頃のものである可能性が高い。

3 その他の遺構(第16図 写真図版3)

第一号溝跡の東側に接するように北西から南に向かって黒褐色土の広がりが確認された。時間的条件から半截等による精査はできなかったが、それを囲むような小柱穴が検出された。

[位置] 調査区II B 9 fから0 f～0 gグリッドの範囲で検出された。

[検出面] 第III層上面である。

[規模] 長さ約7 m、幅約80cm～2.2mである。

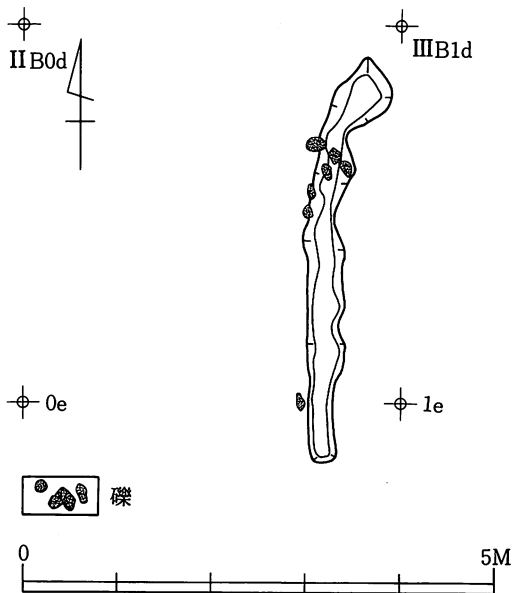
[形状] 9 fから東に伸び、0 fで0 gへ鍵型に曲がって南に延びて不明となる。鍵型に曲がる0 fのところが径約2.2mの範囲にやや楕円状の広がりがあり、それを囲むように西側を除いた箇所に柱穴が回る。

[埋土] 上面に黒褐色土が広がり、湿り気が多くじめじめしている。

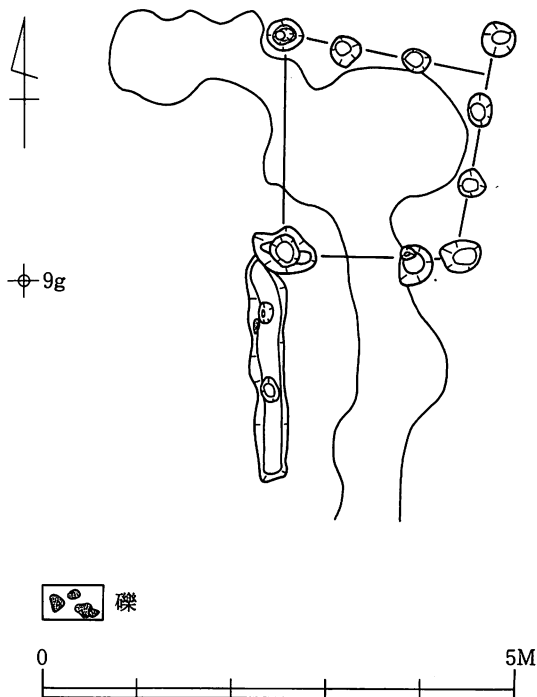
[出土遺物] 遺構内及び周辺から出土していない。

[遺構の性格] 精緻な調査はできなかったが、建物跡群に伴う附属施設と思われる、形状や埋土上面の広がりや土質などから、トイレ跡の可能性が高い。

[遺構の時期] 詳細は不明であるが、建物跡の附属施設と思われることなどから、18世紀頃のものである可能性が高い。



第15図 第二号溝跡



第16図 その他の遺構

V 遺構外出土遺物

調査の結果、遺構外から出土した遺物は、土器・石器・陶磁器・土製品・古銭などである。遺物は調査区 I C・I D・II B 区の畑地に集中して出土しているが、出土量は少ない。遺物の時期と傾向をみると、I C・I D 区では縄文時代の土器・石器、II B 区では近世の陶磁器・土器・古銭であり、出土量はいずれの遺物も極めて少量である。

1 縄文土器

縄文時代の土器は、土器の特徴から時期別に分類した。第 I 群は縄文時代前期、第 II 群は縄文時代中期、第 III 群は縄文時代後・晩期に分類した。分類の蓋然性を高めるため、文様の特徴・施文方法・胎土の特徴などから次のように分類した。

第 I 群土器

1 類：胎土に植物性繊維が含まれ、器表面に縄文が施文される。

2 類：口縁部が磨消され、地文に縄文が施文される。

第 I 群 1 類（第17図1 写真図版7）

胎土に植物性繊維が含まれ、器表面に縄文が施文される。

1 は深鉢形土器の胴部の破片である。地文に単節斜縄文が施文され、胎土に繊維が含まれる。

第 I 群 2 類（第17図2・3 写真図版7）

2・3 は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部は共に平縁である。2 の口縁部は押圧による凹凸があり、いくぶん外反する。口唇部は、丸みをもつように調整されている。口縁部は磨消され、直下から縦位方向に撚糸文が施文される。3 の口縁部は、すぼまり気味になり、やや外反する。口唇部は、平坦に調整され、やや角状を呈する。口縁部は磨消され、直下から地文に左斜位方向に単節斜縄文が施文される。

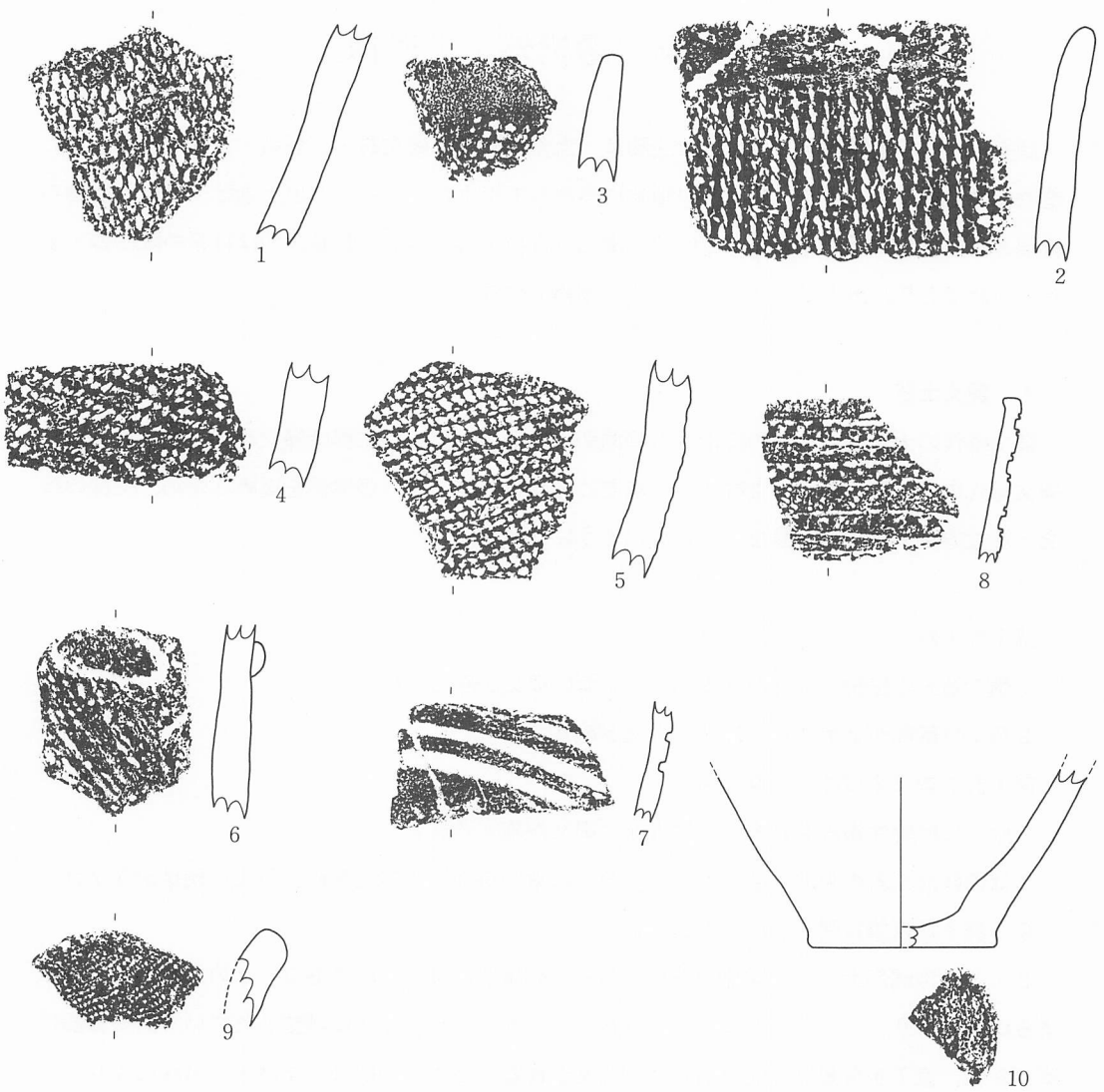
第 II 群土器

1 類：地文に単節斜縄文が施文される。

2 類：地文に単節斜縄文が施文され、横位方向に粘土紐が貼付けられる。

第 II 群 1 類（第17図4・5 写真図版7）

4 は深鉢形土器の胴部の破片である。地文に右斜位方向の単節斜縄文が施文される。器表面の一部が磨消されたのか、縄文の方向がわかりにくいところがある。



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
1	IIA0b III層	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナ	テ	緻密堅固	I-1	7
2	IC6i II層	深鉢	口縁部	口縁部磨消 縦位燃糸文	ナ	テ		I-2	7
3	IC6i II層	深鉢	口縁部	口縁部磨消 単節斜縄文	ナ	テ		I-2	7
4	IIA8e III層	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナ	テ	緻密堅固	II-1	7
5	IC6i II層	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナ	テ	緻密堅固	II-1	7
6	IIA7e III層	深鉢	胴部	単節斜縄文 粘土紐貼付け	ナ	テ		II-2	7
7	ID6h III層	深鉢	胴部	単節斜縄文 平行沈線	ナ	テ	緻密堅固	III-1	7
8	IIA7e III層	深鉢	口縁部	平行沈線と磨消 刻目文	ナ	テ	緻密堅固	III-2	7
9	IIB6g III層	深鉢	口縁部	単節文縄文 波状口縁	ナ	テ	緻密堅固	III-3	7

番号	出土地点・層位	器種	外面調整			内面調整			法量 (cm)			特徴・備考	写真図版
			口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口径	器高	底径		
10	IC6i II層	坏	—	ロク口裏	回転切	—	ロク口裏	ロク口裏	—	[4.7]	(2.2)	口縁部~体部欠損	7

第17図 遺構外出土遺物 縄文土器・土師器

5は深鉢形土器の胴部の破片である。地文に左斜位方法の単節斜縄文が施文される。

第II群2類（第17図6 写真図版7）

6は深鉢形土器の頸部から胴部の破片と思われる。地文に単節斜縄文が施文され、横位方向に粘土紐貼付けられる。

第III群土器

1類：平行沈線文が施文される。

2類：平行沈線間を磨消と刻目文が交互に施文される。

3類：粒径の小さい単節斜縄文が施文される。

第III群1類（第17図7 写真図版7）

7は深鉢形土器の胴部の破片である。縄文が施文され、平行沈線文が施文される。胎土は緻密で堅固、器厚は薄い。

第III群2類（第17図8 写真図版7）

8は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部が磨消され、直下より横位方向の平行沈線で区画され、その間を磨消と幅の狭い篋状工具の刺突による刻目文、縄文が交互に施文される。口唇部は丸く、口縁部は外傾すると思われる。

第III群3類（第17図9 写真図版7）

9は深鉢形土器の口縁部の破片である。形態から波状口縁を呈すると思われ、地文に粒径の小さい単節斜縄文が施文される。口唇部はやや肥厚し、口縁部は外反すると思われる。

2 石器

石器は出土量が極めて少ない。I区では調査区東端の配石遺構群の周辺を中心として、II区では調査区南部の平坦面を中心として出土している。分類は、遺構内より出土した石器も含めて、器種別、加工方法、形態を中心にして行った。

(1) 石鏃（第20図1～4 写真図版9）

先端部が鋭利になっており、刺突を目的として使用されたものと考えられる剥片石器である。

1類：いわゆる尖頭器状のもの

棒状で先端部が鋭利になっており、基部を持たず基部が突出するもの（1）

2類：いわゆる無茎鏃のもの

a：全体の形状がほぼ二等辺三角形となり、基部がやや直線的なもの（2）

b：全体の形状がほぼ二等辺三角形となり、基部がやや抉入のあるもの（3）

3類：いわゆる有茎鏃のもの

茎部を持ち、基部が突出するもの（4）

(2) 石筥（第20図5～9 写真図版9）

偏平な礫を素材として、左右対称で上方が狭く、下方が広がる剥片石器

1類：片面のみ加工しているもの

a：全体の形が撥形（三角形）に作られているもの（5・6）

b：全体の形が短冊形に作られているもの（7）

2類：両面が加工されているもの

a：全体の形が撥形（三角形）に作られているもの（8）

b：全体の形が短冊形に作られているもの（9）

(3) 不定形石器（第20～22図10～28 写真図版9・10）

石鏃・石匙・石筥（所謂定形石器とするもの）を除き、調整痕のある剥片石器を一括した。

1類：2側縁に作り出された刃部が1点に収束しているもの（10）

2類：2側縁に刃部が作り出されているもの（11・14）

3類：剥片の横位に刃部を作りだしているもの（12・13・15・20・23・27）

4類：剥片の下部に刃部を作り出しているもの（16・17・24・28）

5類：マイクロフレイキングが認められるもの（18・19・21・22・25・26）

3 土師器（第17図10～28 写真図版7）

土師器は遺構外から出土している。10は坏である。口縁部が欠損し、体部から底部にロクロ使用痕が残る。底部は回転糸切り調整である。遺物はやや脆弱である。

4 陶磁器

遺物は調査区北側のII B区から、生活用具に使用されたであろう陶磁器の破片などが出土している。出土量は、陶器33点、磁器4点と極めて少量である。この地区では近世の掘立柱建物跡群が検出されており、遺物はその遺構群に伴うと思われる。陶磁器は18世紀～19世紀及び近・現代のものである。

(1) 陶器（第18・19図11～18 写真図版8）

12は皿の底部破片である。皿の見込は釉の蛇の目剥ぎ、外側に灰釉、内側に銅緑釉表裏に釉の掛け分けが施される。製作地は唐津産と思われる、時期は18世紀ごろと思われる。13は甕の胴部破片である。14は大甕の胴部破片である。外側はナマコ釉の掛け流しと内側の黒褐色の釉の掛け分けが施される。秋田県の白岩産である。時期は18世紀後半である。15は小鉢の口縁部破片である。胎土に素穴が見られる。口唇部内側に灰色の釉、内側の鉄釉の細い線が絵付けされ

る。製作地は相馬大堀産と思われ、時期は19世紀ごろと思われる。16～18は播鉢である。

(2) 磁器 (第19図19・20 写真図版8)

19・20は碗の底部破片である。呉須の釉が施される。20は見込が釉の蛇の目剥ぎ、外側の高台付近が特に青白気味の色調を示す。産地は伊万里、磁器は19が18世紀、20が19世紀と思われる。

5 土製品 (第19図1 写真図版8)

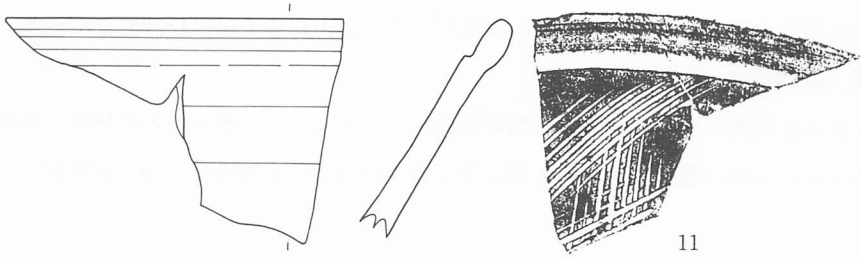
近世(江戸時代)の泥面子である。成型は型作りによる素焼きもので、表面に七福神の「大黒天」が表現されている。裏面は成型時の指頭押圧痕、押圧時に用いた布地痕が見られる。人面の両眼の横のこめかみ付近に穿孔がある。

6 古銭 (第19図1 写真図版8)

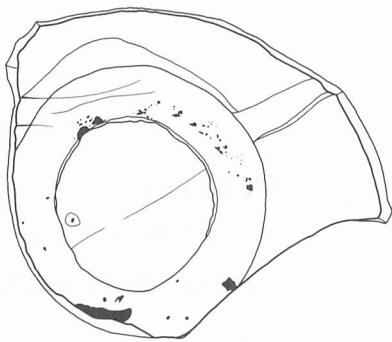
建物跡群が検出された地区から古銭1点が出土している。残存状況は比較的よいが、やや内側に曲がった状態で出土した。表に「寛永通寶」、裏に「元」の文字が記載されている。法量は、外径は円形で約2.2cm、内径は方形で約0.7cm、重量2.08gである。刻印から元文年間(1736～41)に鑄造された新寛永通寶である。

7 木製品

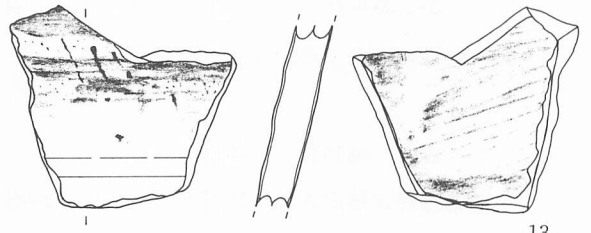
建物跡群が検出された地区から出土した用途不明品で、表面には焼跡が認められた。



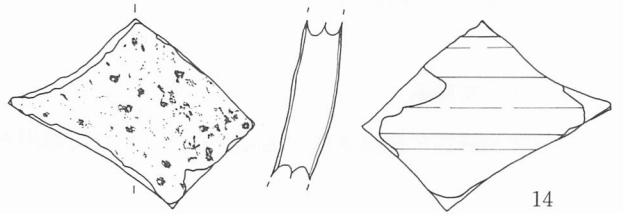
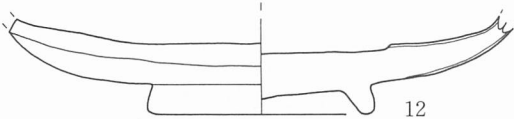
11



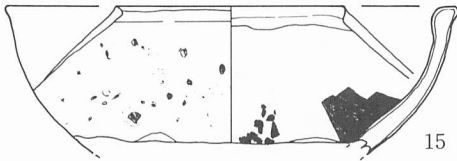
12



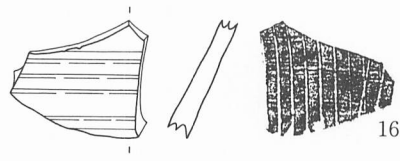
13



14



15

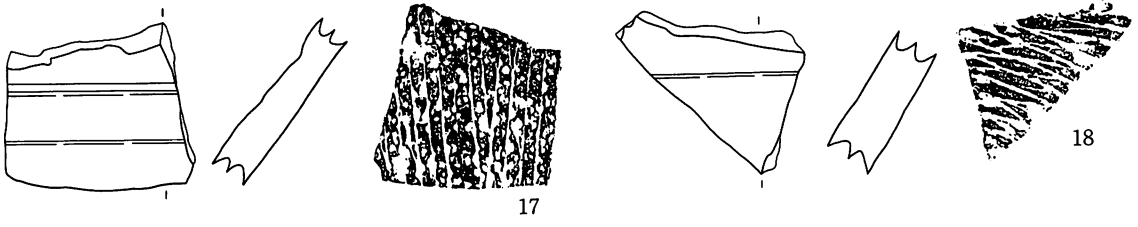


16

S=1/2

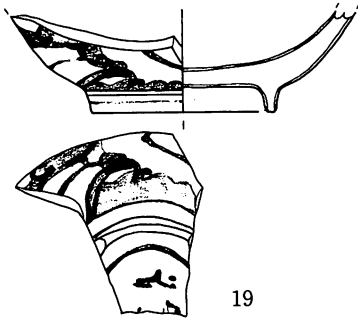
番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付け	製作地	年代	特徴・備考	写真図版
			口径	器高	底径						
11	No205-2 柱穴	陶器掃鉢	14.0	(5.7)	—	赤褐色		不明	19C以降		8
12	II B 9 d III層上面	陶器皿	—	(2.5)	6.0	浅黄色	表灰釉・裏銅緑釉	唐津	18C	見込釉蛇の目剥ぎ 釉掛分	8
13	III B 1 h IV層上面	陶器甕	—	(4.8)	—	明褐色	白濁釉	唐津	18C	横方向の刷毛塗施釉	8
14	II B 3 d III層	陶器大鉢	—	(4.2)	—	黒褐色	表ナマコ釉・裏黒褐釉	白岩	19C以降	表ナマコ釉掛け流し	8
15	II B 7 d III層上面	陶器小鉢	12.0	(3.6)	—	黄橙色	緑釉・内側鉄釉絵付	相馬大堀	19C以降	素穴有	8
16	II B 4 j II層	陶器掃鉢	—	(3.0)	—	赤褐色		不明	19C以降		8

第18図 遺構外出土遺物 陶磁器(1)

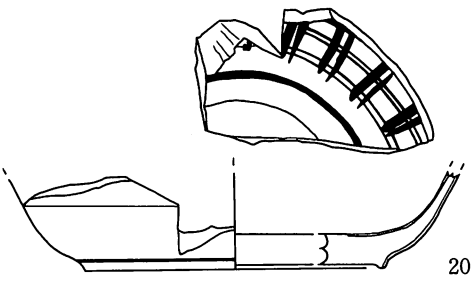


17

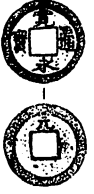
18



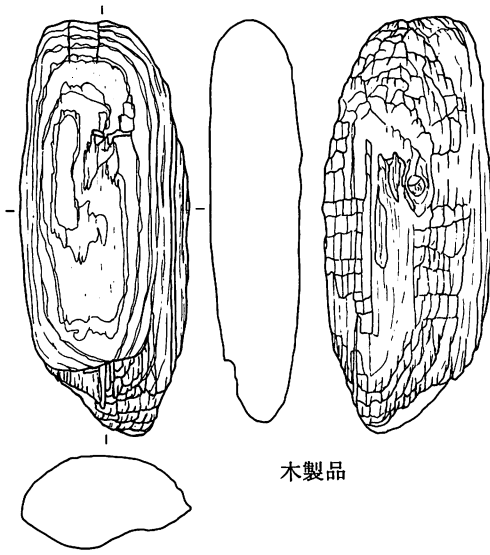
19



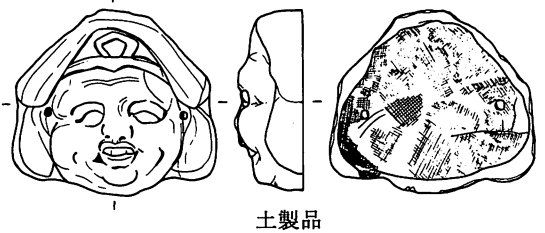
20



古銭



木製品



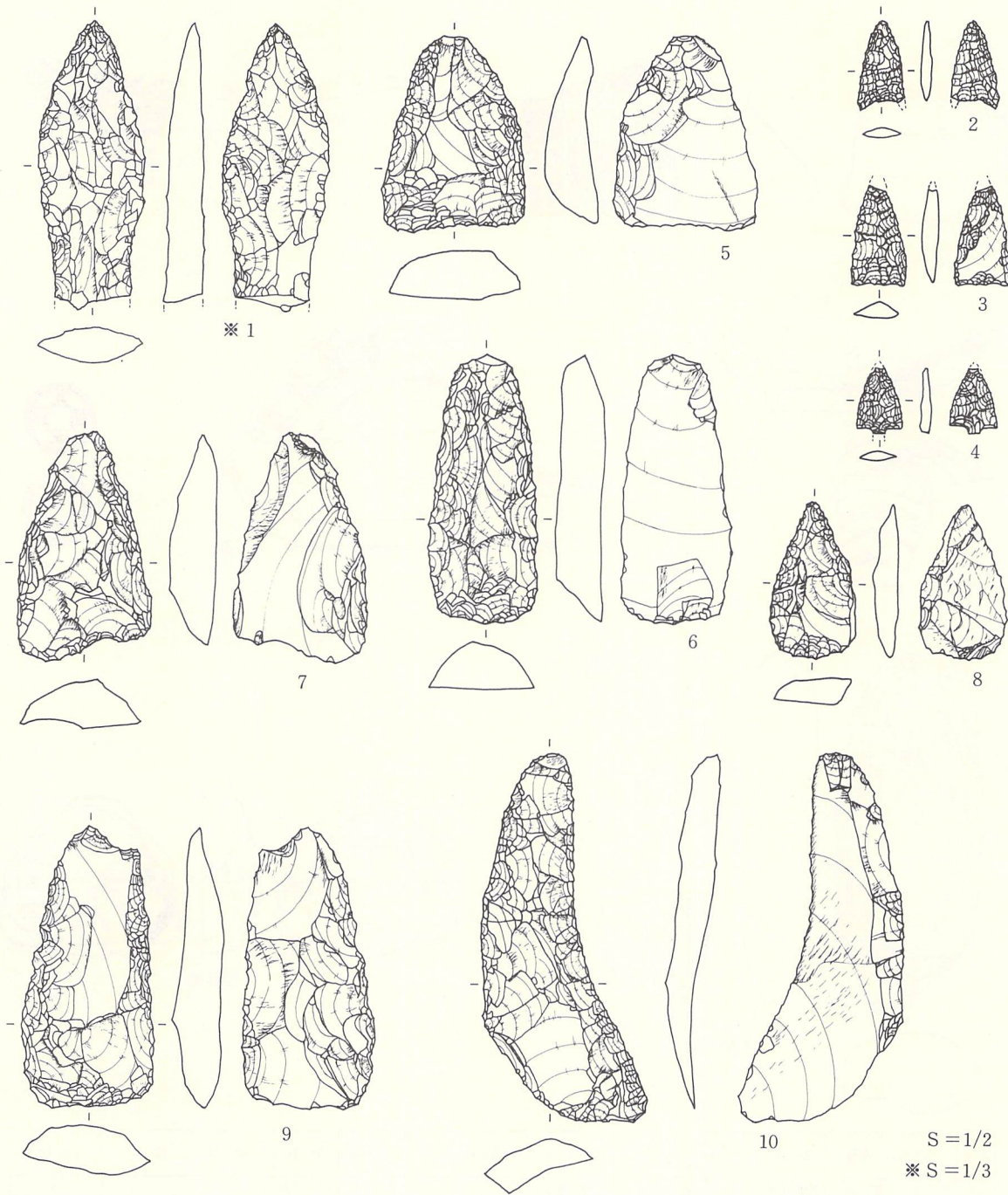
土製品

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付け	製作地	年 代	特 徴・備 考	写真図版
			口 径	器 高	底 径						
17	III B 2 f III 層	陶器指鉢	—	(2.2)	—	灰 色		不 明	19 C 以降		8
18	II B 9 f II 層	陶器指鉢	—	(3.6)	—	灰 色		不 明	19 C 以降		8
19	II B 7 c III 層	磁器碗	—	(2.6)	5.0	白 色	呉須	伊 万 里	18 C		8
20	II A 0 F III 層	磁器碗	—	(24)	8.0	白 色	呉須	伊 万 里	19 C 以降	足込髹蛇の目刺ぎ 表背白気味の色调	8

番号	出土地点・層位	器 種	法 量 (cm)			樹 種	特 徴・備 考	写真図版
			最大長	最大幅	厚 さ			
	II B 9 d III 層	木製品	10.97	4.38	2.58	スギ	楕円状 表面が炭化	8

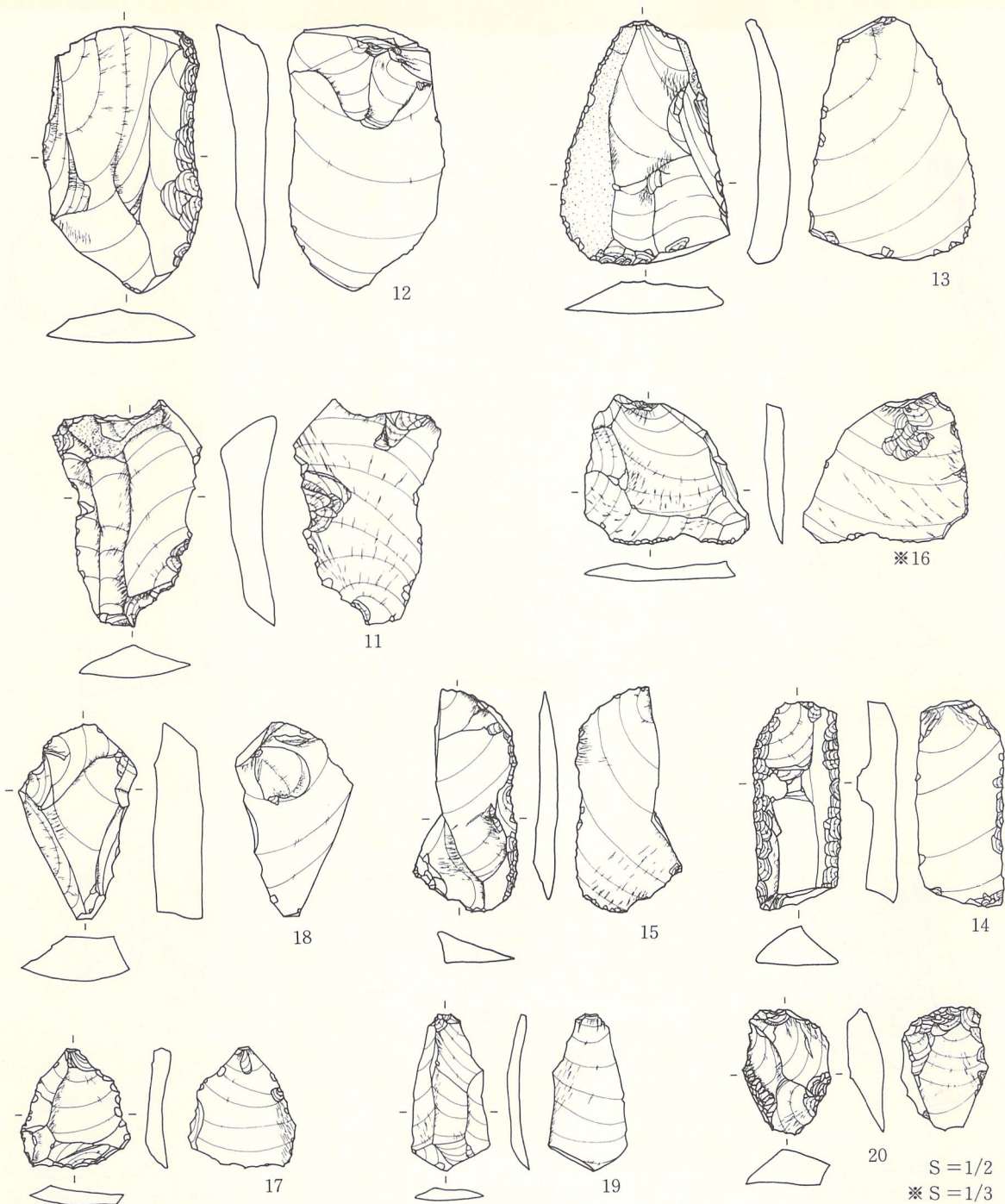
番号	出土地点・層位	器 種	法 量 (cm)			重量 (g)	特 徴・備 考	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ			
	II A o b 表 採	土製品	4.87	5.48	0.51	1.80	大黒天の顔面、耳部両側に穿孔	8

第19図 遺構外出土遺物 陶磁器(2)・古銭・木製品・土製品



番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石質・産地・生成年代	特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
1	II B 5 f III 層	尖頭器	12.6	4.8	1.5	99.06	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	基部欠損	(1)-1	9
2	II C 5 b IV 層	石鏃	2.8	1.4	0.5	2.24	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	尖頭部欠損	(1)-2-a	9
3	II B 2 f III 層	石鏃	2.4	1.3	0.3	0.96	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	基部一部欠損	(1)-2-b	9
4	I D 6 f II 層	石鏃	2.0	1.2	0.3	0.75	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	尖頭部欠損	(1)-3	9
5	III C 9 e III 層上面	石鏃	5.8	4.1	1.4	35.99	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(2)-1-a	9
6	I C 6 b II 層下面	石鏃	6.4	4.8	1.4	37.09	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(2)-1-a	9
7	I C 5 j III 層	石鏃	8.2	3.2	1.3	49.13	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(2)-1-b	9
8	I C 5 i III 層	石鏃	4.7	2.4	0.7	9.74	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(2)-2-a	9
9	II B 6 c IV 層	石鏃	8.5	4.0	1.3	48.71	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(2)-2-b	9
10	I C 7 j III 層上面	不定形	10.8	3.3	0.9	50.21	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統		(3)-1	9

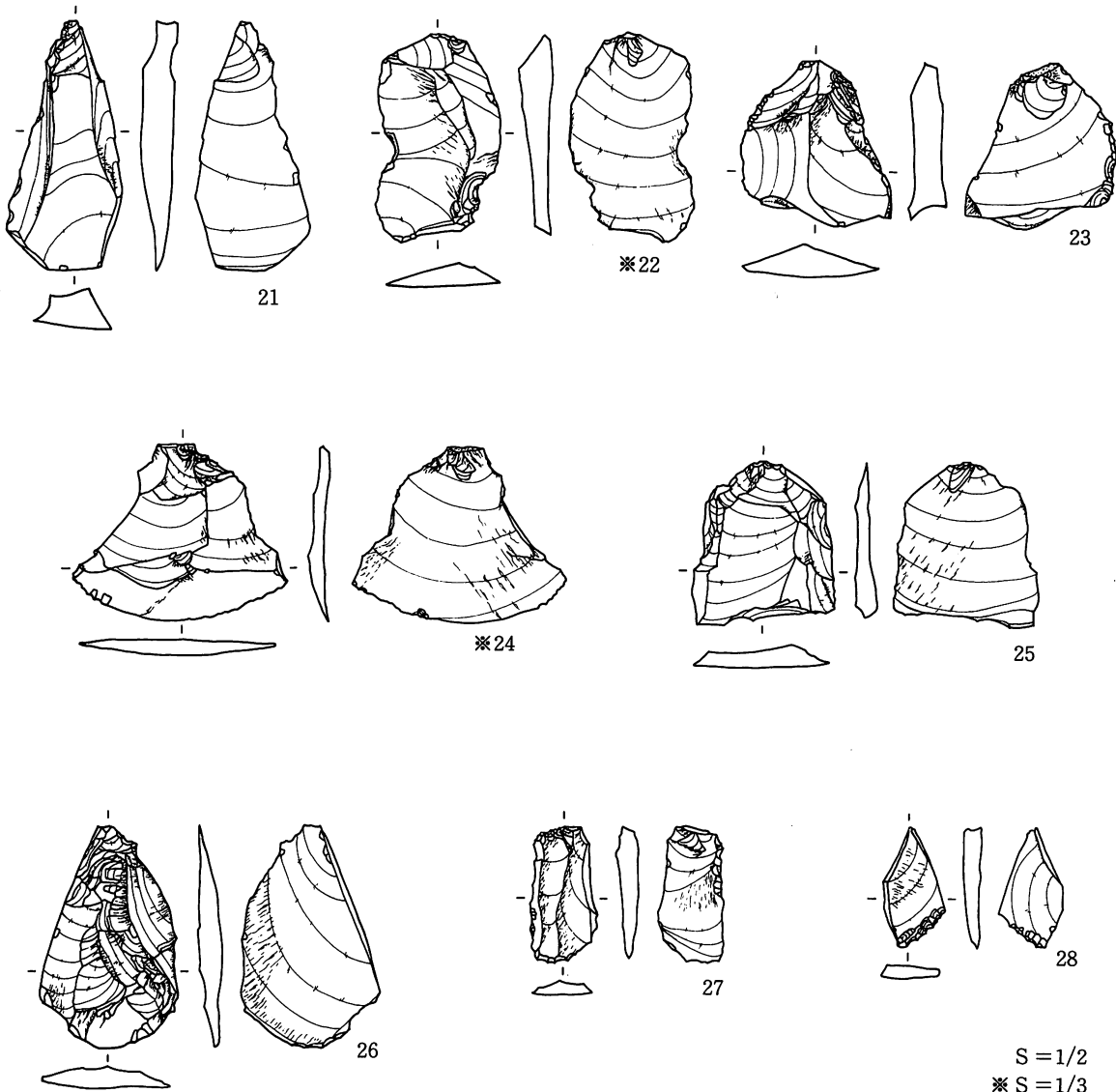
第20図 遺構外出土遺物 石器(1)



S = 1/2
* S = 1/3

番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石質・産地・生成年代			特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ		石質	産地	生成年代			
11	II C 0 b IV 層	不定形	6.4	3.4	1.0	34.05	硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-2	9
12	ID 5 h III 層	不定形	8.0	4.6	1.0	51.55	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-3	9
13	ID 3 e III 層	不定形	7.5	4.8	1.0	41.41	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-3	9
14	II B 8 f II 層	不定形	6.1	2.6	1.2	22.23	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-2	10
15	ID 7 g III 層	不定形	6.4	2.4	0.6	14.48	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-3	10
16	III B 1 g III 層	不定形	6.4	7.0	0.6	46.61	硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-4	10
17	II B 1 d III 層	不定形	3.7	2.9	0.4	7.46	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-4	10
18	ID 3 e III 層	不定形	6.0	3.5	1.4	32.43	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-5	9
19	ID 5 f III 層	不定形	4.8	2.2	0.3	4.14	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-5	10
20	II B 4 e II 層	不定形	3.8	2.7	1.0	10.55	凝灰質硬質泥岩	川尻以西	新第三系中新統		(3)-3	10

第21図 遺構外出土遺物 石器(2)



番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石質・産地・生成年代	特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
21	ID 6 g III 層	不定形	6.8	2.3	0.9	17.03	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-5	10	
22	ID 5 f III 層	不定形	8.1	4.8	0.7	46.06	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-5	10	
23	ID 区 表採	不定形	4.3	3.8	0.8	16.01	凝灰質硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-3	10	
24	ID 5 f III 層	不定形	7.1	8.3	0.6	34.83	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-4	10	
25	ID 5 f III 層	不定形	4.2	3.8	0.4	11.78	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-5	10	
26	ID 5 g III 層	不定形	6.1	3.6	0.6	14.15	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-5	10	
27	ID 5 h III 層	不定形	3.6	1.8	0.4	3.45	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-5	10	
28	ID 6 g III 層	不定形	3.3	1.7	0.3	2.40	硬質泥岩 川尻以西 新第三系中新統	(3)-4	10	

第22図 遺構外出土遺物 石器(3)

VI ま と め

1 遺構について

当初は、調査区東側斜面下の一段高くなっているやや平坦な面から遺構が検出できるものと期待した。しかし、表土直下は岸錐性の礫層が広がり、湧水が幾筋にもなって多量に流れている状況があり、遺構が存在する可能性の低いことが判明した。なお、この平坦な面は、戦前、鉱山が盛んな頃に住民も利用していたトロッコを敷設するために地形を改変したためにできたということを土地の古老から聞くことができた。

掘立柱建物跡群は調査区の北側の狭い範囲で検出されているが、西側は一部が宅地とそれに伴う通路の造成により削平されている。遺構群は限られた狭い範囲の中で重複して検出されている。遺構群の時期は、この範囲から出土している遺物や平面形の類例などから、18世紀後半から19世紀以降の建物跡群で、幾度かに渡る建て替えが行われている。建替えの原因は不明である。建物跡の特徴の一つは、四隅の柱が比較的太くてしっかりしていることである。柱穴は、柱穴痕はあるが柱材が残っていない。埋土に焼土や炭化材や礫などが混じり、壁際に押さえと思われる粘土や積み重ねられた礫が歪んで観察される。抜き取られ埋め戻されたものと思われる。遺構群の新旧関係は、第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の関係では、柱穴の重複関係などから、第1号掘立柱建物跡が第2号掘立柱建物跡の跡に立てられた可能性があるが、その時期幅がどのくらいであるかは不明である。また、第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡の性格については把握できないが、平面形などから第1号・第2号よりはやや時代が下るのではないかと思われるが、推測の域でしかない。第1号・第2号掘立柱建物跡の北側に桁行の中央部にやや楕円状の浅い掘り込みが見られるが(第9図遺構配置図参照)、これは推測であるが、床面をやや掘り窪めて礫を並べて敷き、その上に長方形の箱状の一方に樋をつけて乗せて作った台所の流し場跡と思われ、第1号掘立柱建物跡のものは後に付替をしているものと思われる。建物跡群に伴う南側の第一号溝跡の柴垣跡は、どの建物に伴うかは不明であるが、第1号・第2号掘立柱建物跡の範囲に入るなどから、時期的には並行するものと思われる。第二号溝跡の雨落溝跡は建物との関係から、第1号掘立柱建物跡の庇の軒先より落ちる雨の滴により形成されたものと思われる。

遺構の時期は、遺構群内で出土した遺物と建物の平面形から推測するしかない。同様の遺構が検出されているのは、白木野II遺跡であり、所謂「広間型三間取り」樋割れるものとほぼ類例が合致する。白木野II遺跡の建物跡は、江戸時代中葉の17世紀前半から現代まで約350年間に7回の立替えがあり、母屋の付属する溝・園池・庭などの遺構が伴って検出されている。この

内、所謂「広間型三間取り」に属する時期が17世紀前半から18世紀後半にかけて構築されている。本遺跡における第1号・第2号掘立柱建物跡も、遺構群内からの出土陶磁器の時期と照合すると、同様の時期で括ることができると思われる。

2 遺物について

遺物は出土地域が限られている。縄文時代の土器は調査区西側の畑地に集中しているが、その量は少ない。土器は水の影響による脆弱であり、拓本に耐えうるものは少ない。土器の時期は、胎土に植物性繊維を含む時期のもの、あるいはそれ以降の時期と幅が広い。

第Ⅰ群土器は、縄文時代前期に属し、1類が胎土に植物性繊維の混入する前葉の土器、2類がそれが含まれなくなる中葉以降の土器である。第Ⅱ群土器は縄文時代中期の土器であり、焼成も良く堅い。1類は中期中葉以降に、2類は大木8式期頃に比定されるであろう。第Ⅲ群土器は縄文時代後・晩期に比定される土器である。1・2類は施文方法から後期中葉、3類は口縁部の形態、縄文原体の粒径などから晩期後葉かあるいはもう少し新しくなるかも知れない。石器類も縄文土器と同様の様相を見せる。フレーク類も共に出土しているが、点数は少ない。掲載したものの中には、フレーク類として分けられる器種もあるが、参考資料としてあげた。

陶磁器は、18世紀から現代までのものが建物跡群が検出された調査区北側地区から出土している。破片の多くは細片であり、凶化できるものは著しく少ない。掲載したものは、陶器が18世紀頃の佐賀県唐津産2点、19世紀以降の秋田県白岩産1点と福島県相馬大堀産1点である。陶器播鉢は産地不明であるが、19世紀以降のものである。磁器も陶器と同様であるが、点数が極めて少なく、18世紀以降の佐賀県伊万里産2点である。

その他、極めて現代に近いと思われる泥面子は七福神の一つ「大黒天」であり、どこの家庭でも縁起物として飾られていたものであろう。また、木製品は生活用具と思われるが、器種は不明である。

3 まとめにかえて

本内Ⅰ遺構の調査の結果、18世紀から19世紀以降（江戸時代後葉）の建物跡と附属施設、陶磁器が検出され、近世民家研究史及び建築史上貴重な資料が確認された。また、遺構は確認できなかったが、遺物として縄文土器が出土し、古くから生活の場として利用されたことが推定される資料も確認された。

川尻地区を東流する和賀川の右岸の高位段丘上には、旧石器時代の遺物を出土する遺跡が並んでいる。また、縄文時代から近・現代までもの長い時間、多くの人間が活動形態は異にするが、生活の営みの場としている。

湯田町内に存在する遺跡は、時代・遺跡ごとにその内容に疎密はあるもの、旧石器時代からの人間の営みの痕跡をたどることができる。これらの資料は、東北横断自動車道秋田線建設に伴う緊急発掘調査が実施された遺跡からの発見であり、おのずから限定されたものであるものの、大台野遺跡発掘調査の実績を上回る旧石器の編年上の貴重な資料が得られ、縄文時代の竪穴住居跡などの遺構も発見されている。今後、発掘調査の事例が増加し、湯田町の歴史に関する新知見が得られることを期待したい。

〈引用・参考文献〉

- 岩手県 (1979) : 『北上山系開発地域・土地分類基本調査「川尻」』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1993) : 『人当 I 遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第193集。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1993) : 『塚野 I・II 遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第199集。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 『白木野 I・II・III 遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 『越中畑IV・V 遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第201集。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 大渡 II 遺跡発掘調査概要。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 峠山牧場 I 遺跡発掘調査概要。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 本内 II 遺跡発掘調査概要。
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1994) : 耳取 I 遺跡発掘調査概要。
- 岩手県立博物館 (1993) : 『岩手県北上市和賀町愛宕山遺跡発掘調査報告書』。岩手県立博物館研究報告 第9冊。
- 高橋信雄他 (1982) : 『岩手の土器』。岩手県立博物館。
- Toyosima, M. (1984): The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000 years in the Ou backbone Range, Northeastern Japan. the Science Reports of the Tohoku University, 7th Series (Geography), 34, 88-105.
- 中川久夫・他 (1971) : 北上線沿線の段丘群。東北大学地質古生物研報, No.71, 47—59。
- 日本の地質「東北地方」編集委員会 (1989) : 『日本の地質 2・東北地方』。共立出版。
- 長谷地質調査事務所 (1981) : 『北上川流域地質図 (二十万分之一) 説明書』。
- 和賀町教育委員会 (1984) : 『和賀仙人遺跡発掘調査報告』。和賀町文化財調査報告書第11集。
- 和賀町教育委員会 (1989) : 『和賀町内遺跡分布調査報告 I』。和賀町文化財調査報告書第18集。
- 湯田町史編集委員会 (1979) : 『湯田町史』。湯田町。

本内 I 遺跡出土材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は1点で、近世（18世紀?）のものとされている用途不明の木製品である。試料の表面には焼痕が認められた。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。なお作製したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

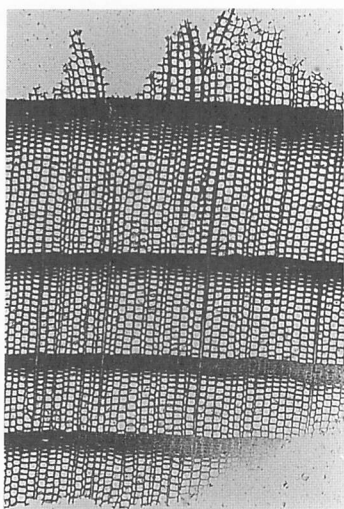
3. 結果

試料はスギに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

・スギ（*Cryptomeria japonica*） スギ科

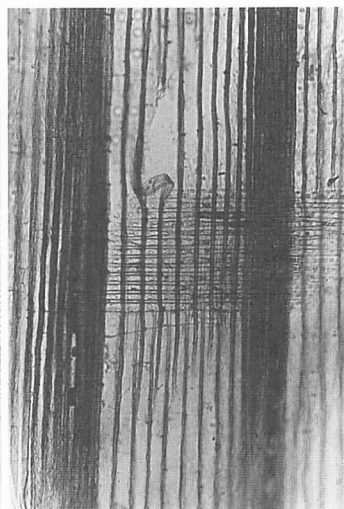
早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

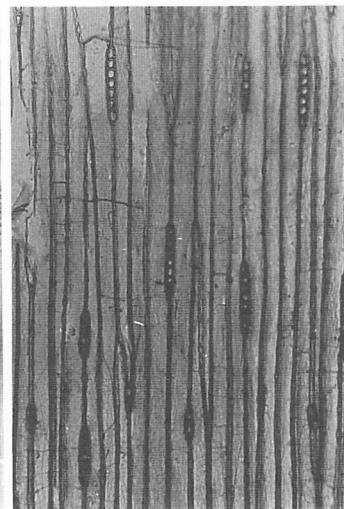


木口

×40 柾目

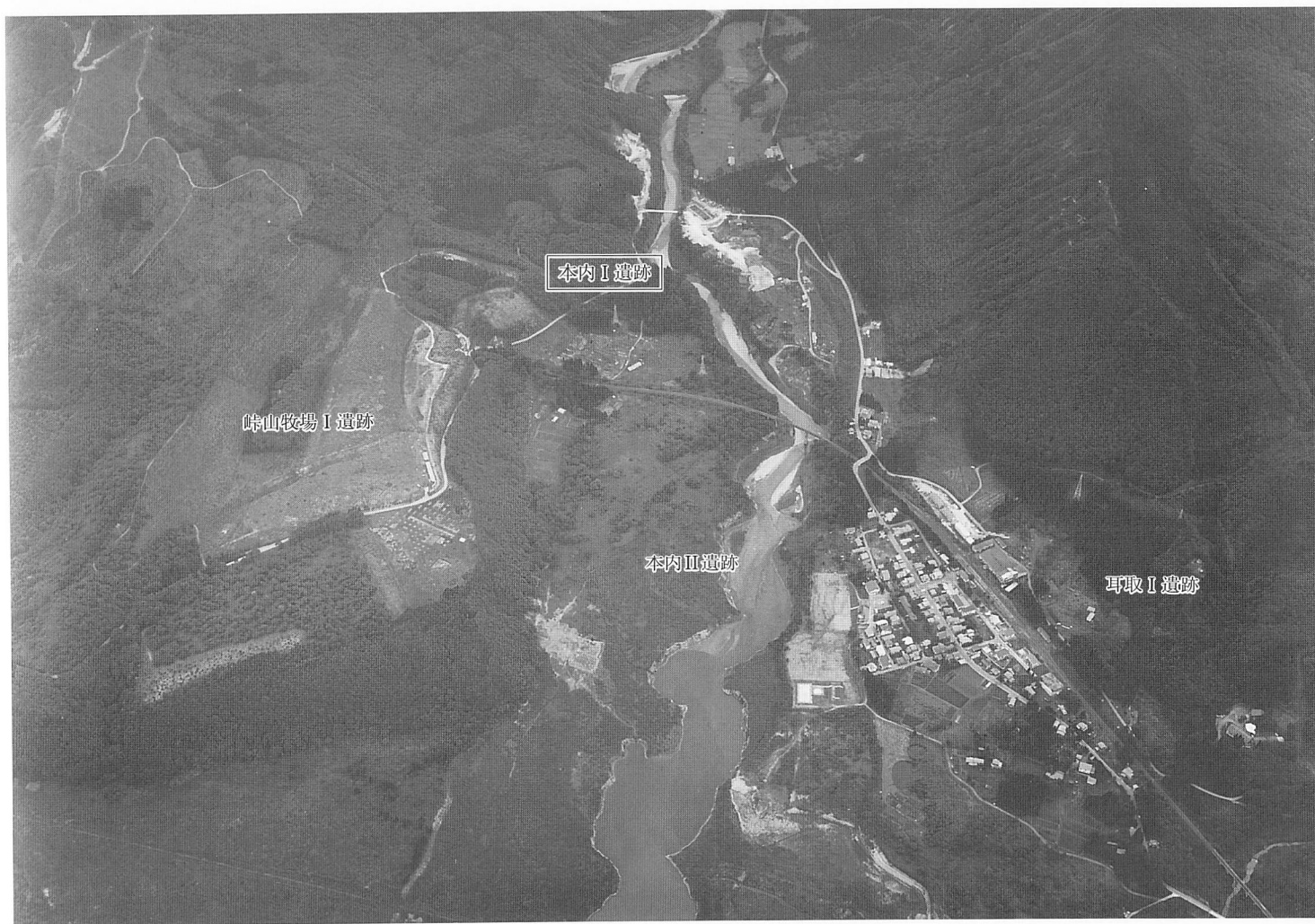


×100 板目

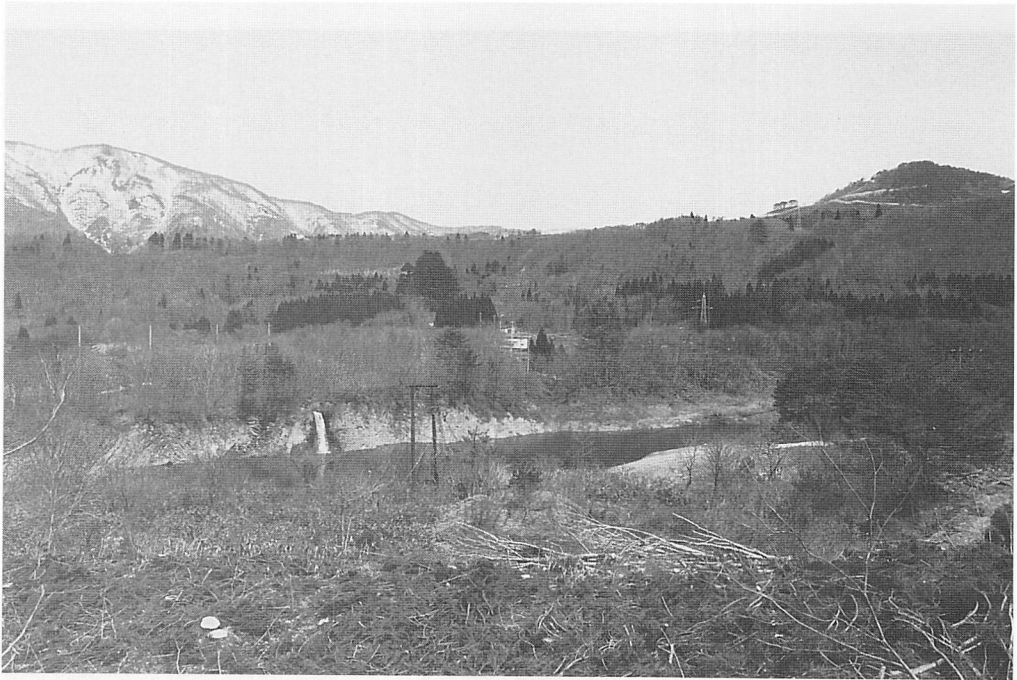


×100

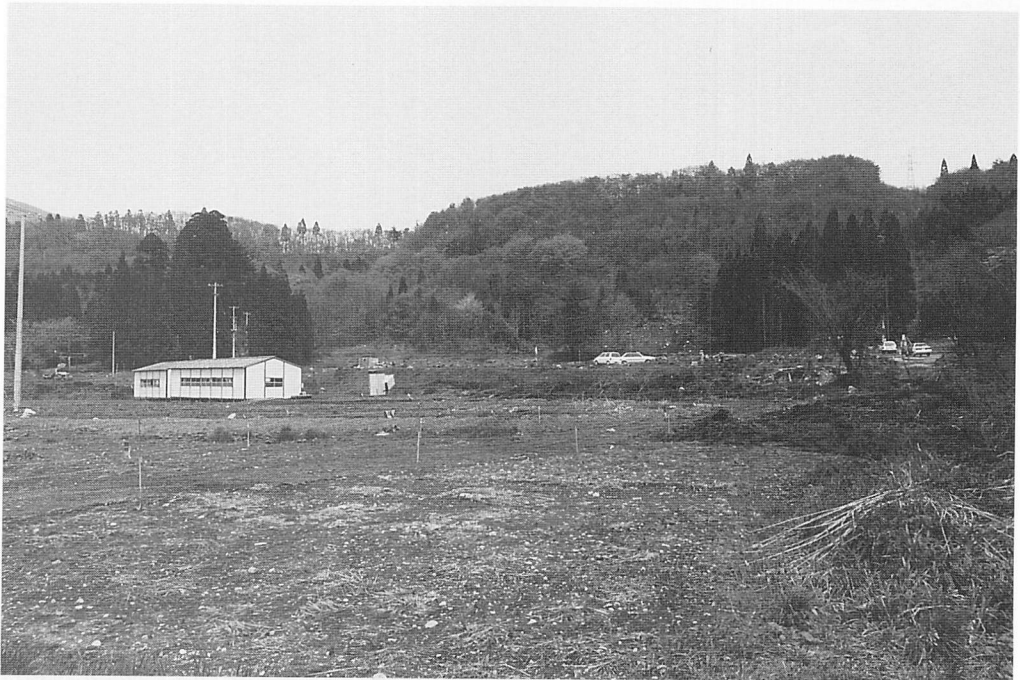
写真図版



写真図版 1 遺跡遠景（北西より）



遠景（西から）



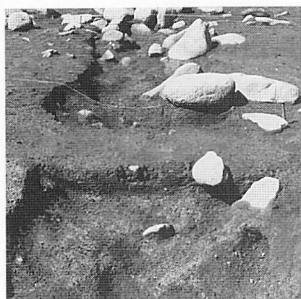
近景（南西から）



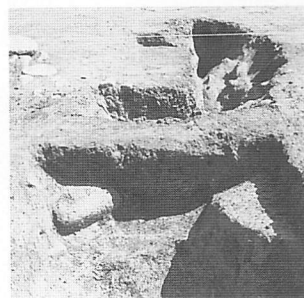
溝跡・掘立柱建物跡群



溝跡断面 A



溝跡断面 B

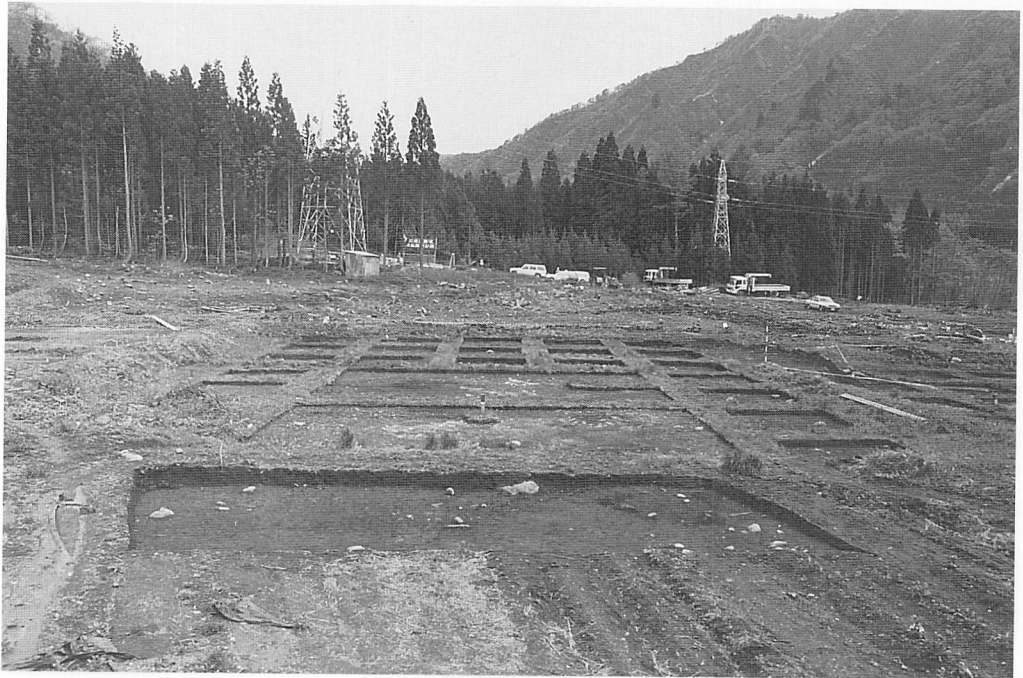


溝跡断面 C

写真図版 3 溝跡・掘立柱建物跡群

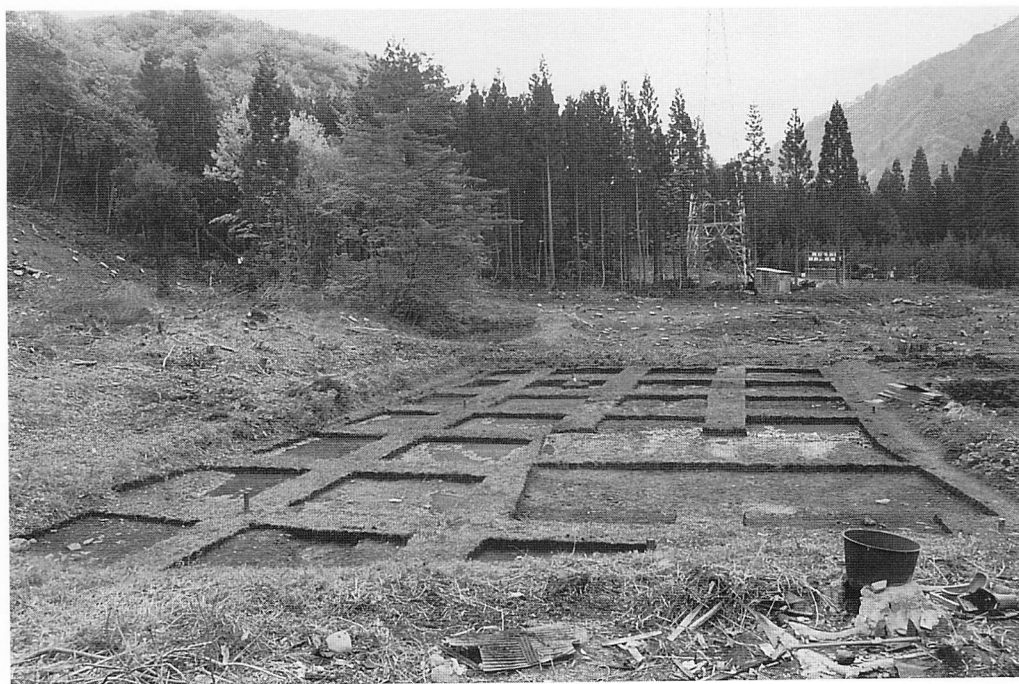


I B · I C ~ II B · II C 水田地区完掘



II B · II C 水田地区完掘

写真図版 4 完掘状況(1)



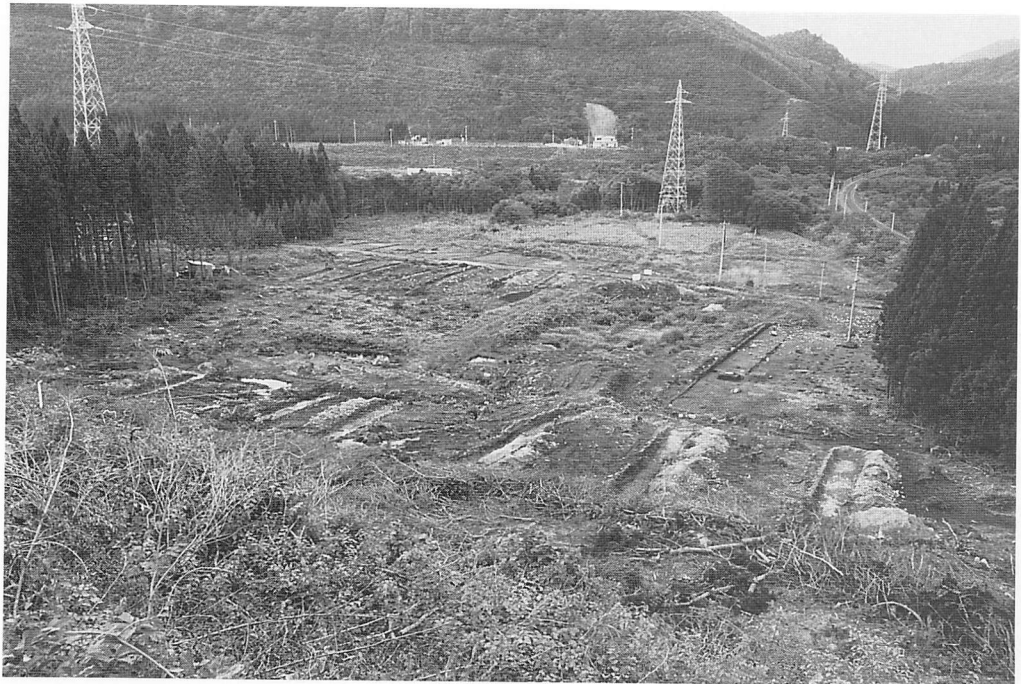
ⅢB・ⅢC水田地区完掘



ⅢB・ⅢD区完掘

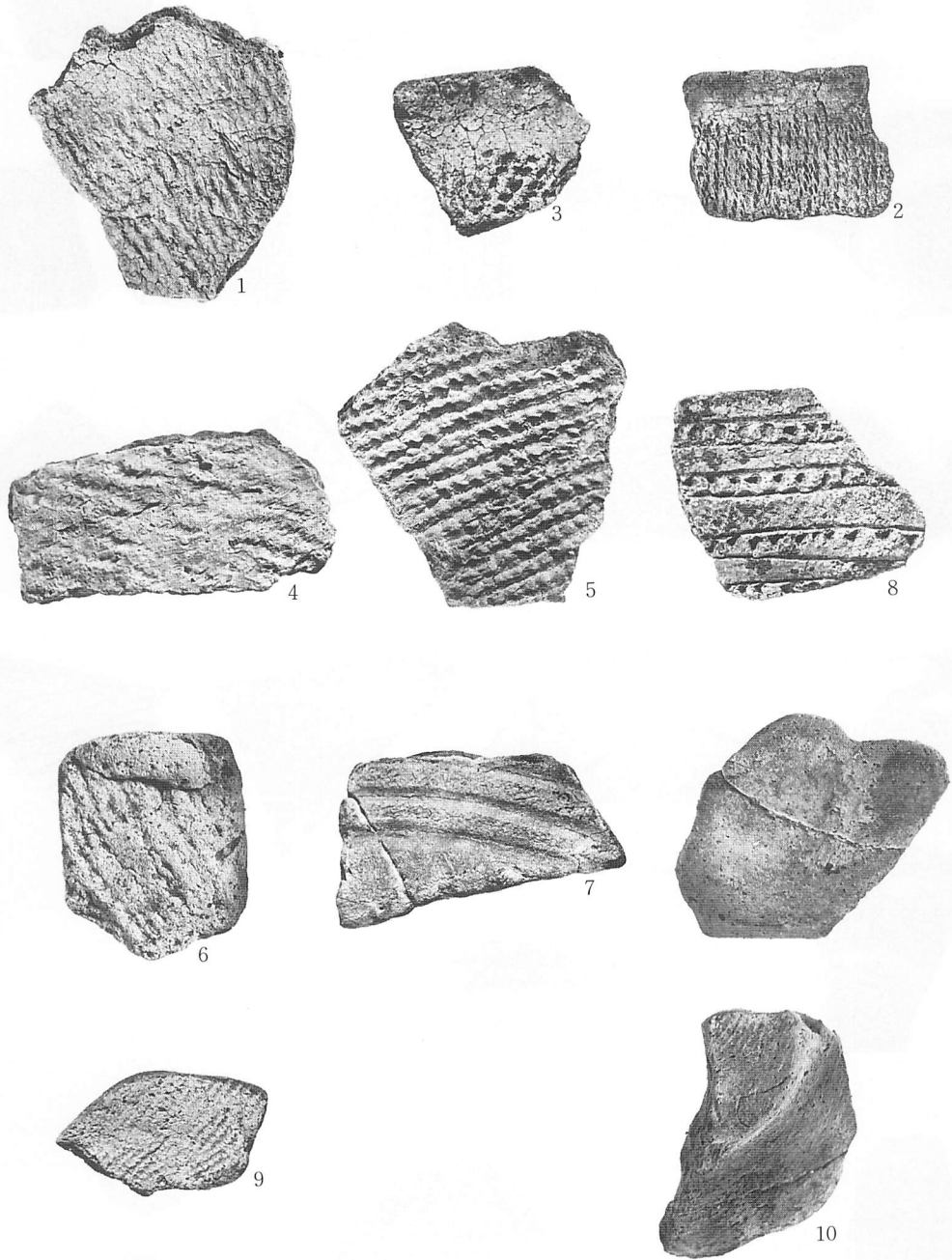


完掘（南東から）

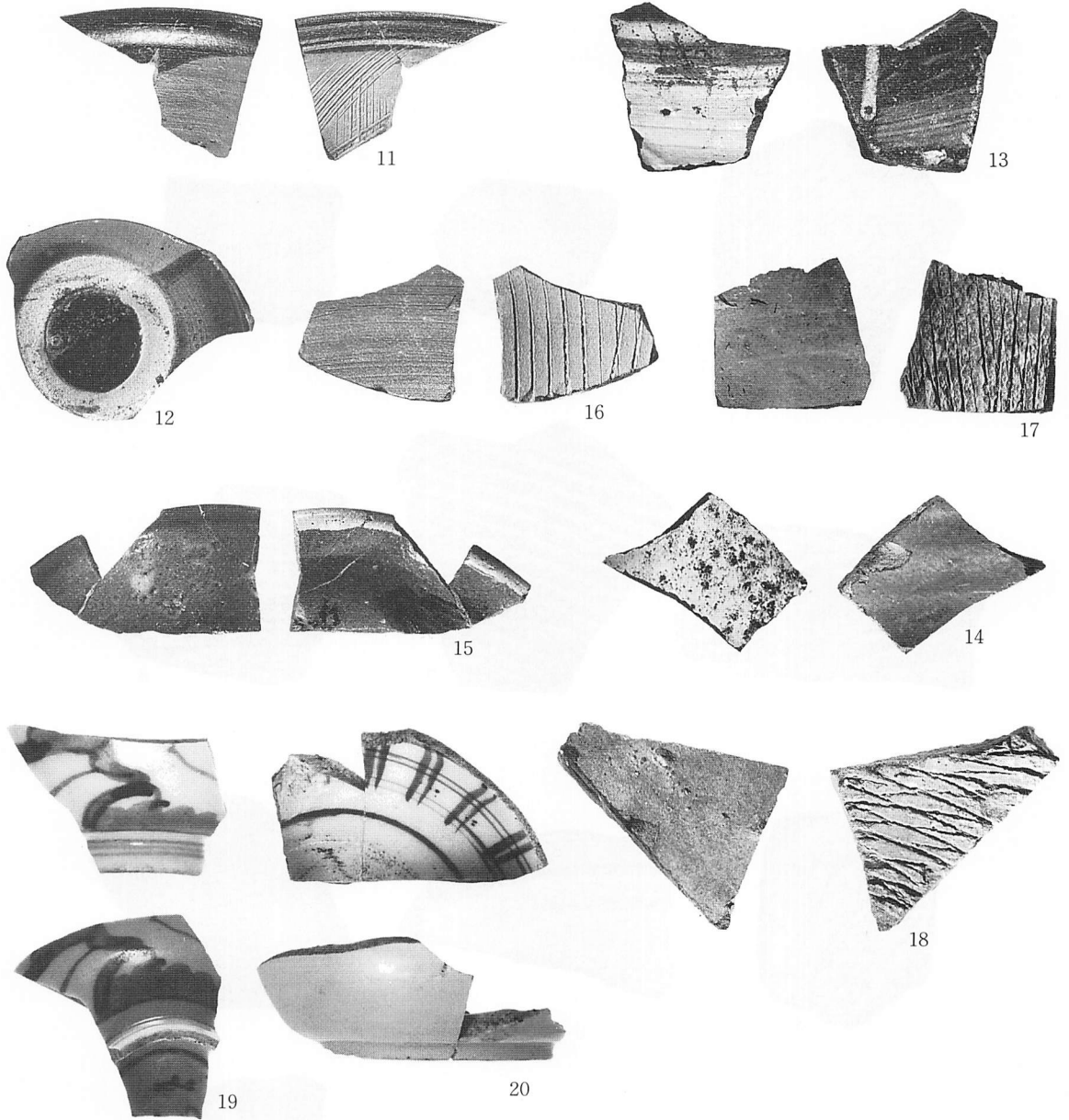


完掘（北東から）

写真図版 6 完掘状況(3)



写真図版 7 遺構外出土遺物 縄文土器・土師器



木製品

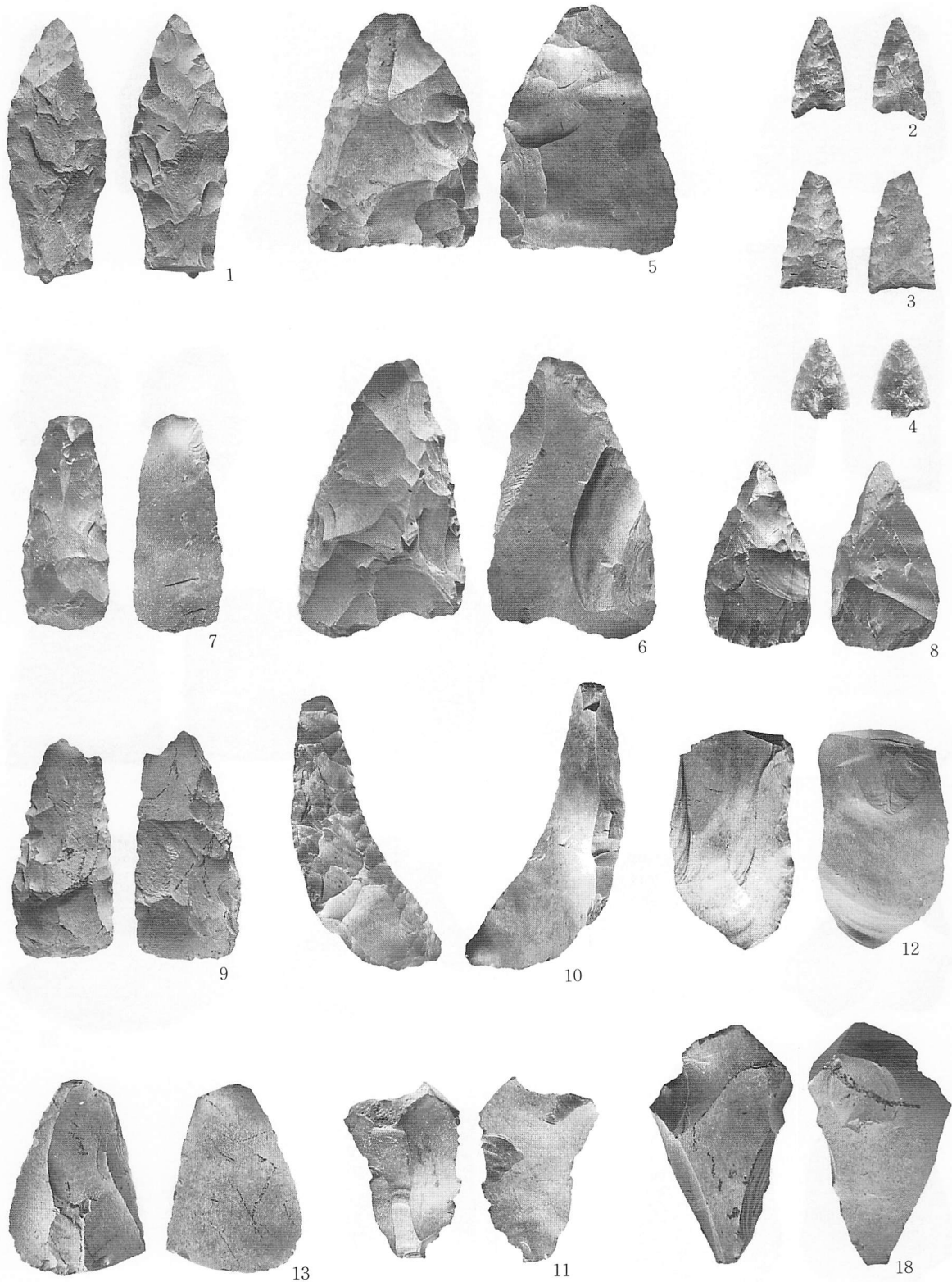


土製品

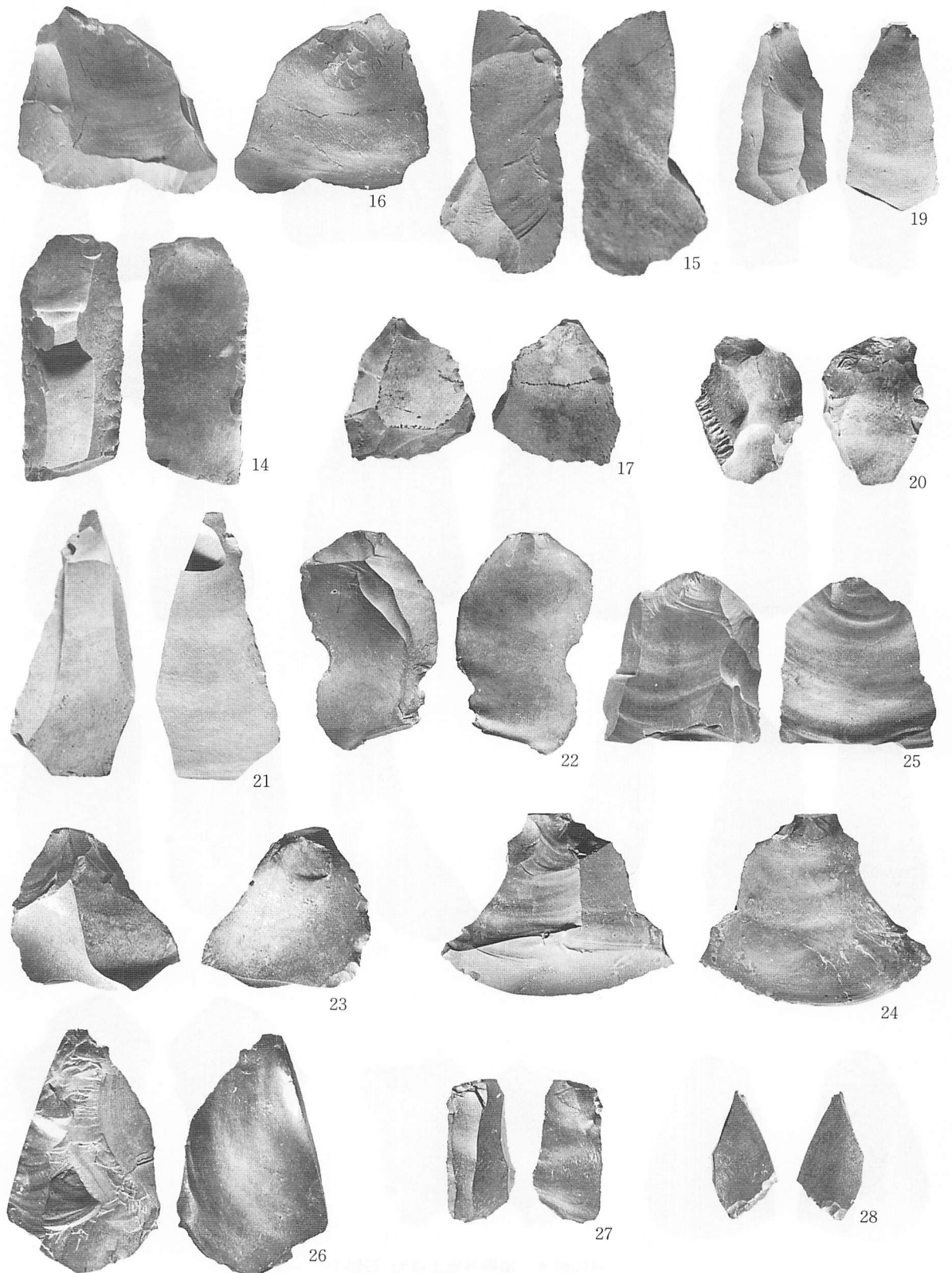


古銭

写真図版 8 遺構外出土遺物 陶磁器・古銭・木製品・土製品



写真図版 9 遺構外出土遺物 石器(1)



写真図版10 遺構外出土遺物 石器(2)

報告書抄録

ふりがな	ほんないいちいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	本内 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第211集							
編著者名	斎藤 實 三浦謙一 佐瀬 隆							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 Tel 0196-38-9001							
発行年月日	西暦 1994年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 '''	東経 '''	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほんないいちいせき 本内 I 遺跡	いわてけんわがひんがみんぬまぢ 岩手県和賀郡湯田町	03206		39度 17分 28秒	140度 50分 47秒	19930420~ 19930924	14,000	東北横断自動車道秋田線建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本内 I 遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 近世	掘立柱建物跡 溝跡	4棟 2条	陶磁器 縄文土器 縄文時代の石器		18世紀後半から19世紀以降の民家跡 2棟。	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實		
副 所 長	千 葉 政 男		
〔管 理 課〕			
管理課長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫
〃	久保田 幸 恵		
〔調 査 課〕			
調査課長	鈴 木 恵 治	文 化 財	金 子 昭 彦
課長補佐	三 浦 謙 一	専門調査員	〃
〃	高 橋 與 右衛門	〃	木 戸 口 俊 子
主任文化財	菊 池 強 一	〃	大 道 篤 史
専門調査員	〃	〃	阿 部 勝 則
〃	渡 辺 洋 一	〃	星 雅 之
〃	工 藤 利 幸	〃	羽 柴 直 人
〃	中 川 重 紀	〃	高 木 晃
〃	佐々木 清 文	〃	村 上 拓
〃	高 橋 義 介	〃	高 橋 佐 知 子
〃	中 村 英 俊	〃	杉 沢 昭 太 郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	溜 浩 二 郎
文 化 財	千 葉 孝 雄	期 限 付	鎌 田 精 造
専門調査員	〃	専門職員	〃
〃	菊 池 人 見	〃	柳 田 磨 樹
〃	伊 東 格	〃	高 橋 英 樹
〃	吉 田 充	〃	佐 藤 修 一
〃	斎 藤 邦 雄	〃	稻 垣 雅 宏
〃	高 橋 一 浩	〃	田 畑 博 之
〃	鎌 田 勉	〃	元 吉 弘 明
〃	小山内 透	〃	熊 谷 和 明
〃	松 本 建 速	〃	佐々木 裕 司
〃	笹 平 克 子	〃	千 葉 貴 子
〃	花 坂 政 博	〃	沼 田 和 宏
〃	佐々木 務	〃	後 藤 円
〔資 料 課〕			
資料課長	駒 嶺 高 幸		
主任文化財	高 橋 正 之		
専門調査員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第211集

本内 I 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年10月24日

発行 平成6年10月31日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6番49号

TEL (0196) 53-4151